





大学コンソーシアム学都ひろさき 令和5年度 活動報告集





ごあいさつ

弘前は5高等教育機関をはじめ、多くの高等学校などが存在する文字通りの学都ですが、単に学生が多いだけでなく、弘前は「学都」と呼ばれるに相応しい風格のある街だと、他の街との比較ではなく、そう思います。加えて、学生は自転車があれば何処にでも行くことができ、「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動も弘前ならではの利点を活用して一層活発になるものと期待しています。

弘前の利点はそれにとどまるものではありません。弘前市からはコンソーシアムの活動に予算面や活動面での支援をいただいており、また、市民の皆さんの多大な協力をいただいています。なにより、大学に対する市民の期待にも大きなものがあると思いますので、大学としても地域との連携による教育研究の在り方を追究することに大きな価値を置いています。

いつも申し上げていることですが、特に大学における教育研究は多様でなければなりません。一大学の努力だけではなく、コンソーシアムを主体として地域の自治体や企業、団体の皆さんと連携して活動できることは、「学都ひろさき」に拠点を置く私たち5高等教育機関にとって大きなアドヴァンテージです。そのことを最大限に活用して、未来社会を担う人材の育成に邁進していければと願っています。

「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動を多くの方々に知っていただい て、引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

令和6年3月 大学コンソーシアム学都ひろさき会長 国立大学法人弘前大学

墨 福田莫作



目 次

ごあいさつ

令和5:	年度活動報行	놐
------	--------	---

I. 教育事業	
●共通授業	 1
○インターンシップ受入	 24
●学生地域活動支援事業	
・弘前学院大学地域活性化サークル(弘前学院大学)	 29
・ヒロガクインクルージョンネットワーク(弘前学院大学)	 32
· 弘大囃子組(弘前大学)	 40
・To save lives (弘前大学)	 51
・Waku waku club (弘前医療福祉大学)	 60
· 弘前医療福祉大学救急救命研究会(弘前医療福祉大学短期大学部)	 69
・成果発表会	 73
Ⅱ.連携推進事業	
● 5 大学合同シンポジウム	 77
●各大学公開講座等助成事業	
・放送大学青森学習センター	 81
・弘前医療福祉大学短期大学部	 82
・柴田学園大学短期大学部	 83
Ⅲ. 学生交流事業	
●学生団体シンポジウム	 85
○ひろさき移動キャンパス	 93
○学生委員会「いしてまい」活動	 95

令和5年度活動報告

I. 教育事業

共通授業

1. 共通授業とは

「地域の課題を理解し、地域の発展を考える」をテーマに、地域の課題を具体的に理解しその解決について自ら考えることが出来る人材を育成することを目的に、オムニバス形式で開講している。本講義は平成25年度から開講しており今年で11年目となる。

また、平成28年度から本コンソーシアム加盟大学の弘前学院大学、柴田学園大学、弘前大学の3大学で本授業を単位として認定している。

2. 概要

○テーマ

地域の課題を理解し、地域の発展を考える。

○目的

青森の地域課題の解決や資源の活用の先行事例を学び、その意義や限界を理解し、地域課題の解決や資源の活用に関するプロジェクトを企画・実施をできるようになること

○内容

1日1課題(テーマ)とし、担当教員、弘前市職員、民間企業社員等が地域の様々な課題について講義を行い、その解決策についてのグループディスカッションやグループワーク、フィールドワーク等を行い発表する。

○対象・定員

弘前学院大学、柴田学園大学、弘前大学の学生55名程度

○日時・授業数

令和5年8月22日(火)、23日(水)、24日(木) 9時30分~18時20分

15コマ (1コマ90分×5コマ×3日間)

○会場

ヒロロ4階 市民文化交流館ホール (3日間共通)

3. 受講者数

	22日	23日	24日
弘前学院大学	16名	16名	16名
柴田学園大学	35名	3 5 名	3 4 名
弘前大学	2名	2名	2名
計	53名	53名	5 2 名



令和5年度の募集チラシ

4. 各日の授業

(1)8月22日(火)

テーマ	学校と地域社会が連携した健康づくりを考える〜弘前市の児童生徒の健康診断結			
	果と健康課題から~			
概要	本共通授業において、児童生徒の健康診断を体験し、学校の健康教育取組事例を知ることで、自身を含めた弘前市民の健康課題に興味・関心を高める。子供時代から始める健康教育・健康づくりの取組について、大学生として主体的に考える機会を設ける。			
担当教員	弘前大学教育学部 准教授 新谷 ますみ			
協力 教職員等	弘前大学人文社会科学部 教授 森 樹男			
授業の流れ	【1コマ目】9時30分~10時40分 ・導入アイスブレイク&自己紹介 ①今ハマっているものは? ②各自の大学名、氏名、学年及び①について →次の人を発表者が当てていく ・講義の流れの説明 ・児童生徒の健康の実態と健康課題(講義) ①学校保健統計調査結果からみる児童生徒の健康課題 【2コマ目】10時50分~12時00分 ・地域社会と連携した学校の健康教育の取組事例(講義) ・学校における健康診断の実際(講義) ①児童生徒の健康診断の方法 午後からの実習の説明 【3コマ目】12時50分~14時00分 ・学校における健康診断の実習体験 ①発育測定 ②視力			
	③聴力④色覚⑤運動器健診			

【4コマ目】14時10分~16時40分

・これからの健康教育・健康づくりの取組について (グループディスカッション)①グループディスカッション

②各班の発表

まとめ

全体討議

【5コマ目】16時50分~18時20分

~アイスブレイク&自己紹介~



今ハマっているものや好きなも のなどについて話し合いながら、 聞き手はメモを取っている

~学校保健統計調査結果からみる児童生徒の健康課題~

授業の様子

弘前市と全国を比べた時の弘 前市の健康課題について講義 する新谷先生



~地域社会と連携した学校の健康教育の取組事例~



実際に行われている取組を学び、 どのように感じたのかなど感想を 発表する学生

~学校における健康診断の実習体験~

色覚を実際に体験した学生 と、色覚の検査について簡 単な講義をする TA





聴覚検査の正しいや り方について指導を 受けている学生

授業の様子



視力検査を行うための 注意事項などの講義を 聴く学生

運動器健診で、正 しく体を動かせて いるか・体のゆが みがないかを確認 している





発育測定を行い自分の身 長・体重を知る学生、ま た、そこから BMI を出 している

~これからの健康教育・健康づくりの取組について (グループディスカッション) ~



これまでの講義や実技を 通して学校の健康教育に 何が必要なのかなどを話 し合っている

授業の様子

考えている発表内容について先生からアドバイス をもらっている



~発表~



自分たちがグループディ スカッションを通して考 えていた案を全体に発表 している



発表に対して気になった 点などを質問し発表案を 具体化している

授業の様子

~まとめ・全体討議~



本日の授業全体に対する講評を行う新谷先生

初日の授業は、学校の健康教育を学んだうえで実際に健康診断をする側・される側で行った。この授業には、担当教員の「弘前市の健康課題を主体的に考える きっかけにして欲しい」という思いが込められていた。

授業に参加した学生は、1日目ということもあり講義時は緊張が見られたが、午後の実習が始まってからは、グループワークだったこともあり緊張がほぐれた様子で取り組んでいた。講義では、新谷先生の約20年間の養護教諭の経験を基に、生徒の実体験を踏まえた学校保健の知識が述べられた。また、健康診断の実技体験では、自身やペアの人の視力や聴力・運動器系についてどのくらいの数値なのか、それが何を意味するのかなど学んでいた。また、人と健康診断を行うことで、次に自分が健康診断を行うとなった時に気を付けなければならないことを知ったうえで受けることができる。また、運動器系では普段気づかない体のゆがみなどに気づき驚いている学生もいた。

まとめ

本日の講義や実習を通して、学生が学校の健康教育について深く考え、健康に 気を遣うという意思が感じられた。自身の健康だけでなく、家族や青森県民など の健康維持活動を啓発しようと考える学生もいた。本日の授業では、会場の全員 に意見を述べる機会が設けられており、全員が考えたことや気付いたこと等を深 掘りして、それを発信する良い機会であったとも言える。

(2) 8月23日(水)

テーマ	地域の健康課題と食生活		
概要	地域の健康課題と食生活について学ぶ。また、受講者自らの食生活について考える機会を設けて、改善するために必要なことを考える。最後に、グループでの活動のまとめとして、地域の健康作りにおける「あったらいいな」と思うサービスについて考えて発表する。		
担当教員	柴田学園大学生活創生学部 教授 前田 朝美		
ゲスト スピーカー	弘前市企画部企画課 参事 櫻庭 智之氏		
協力 教職員等	弘前大学人文社会科学部 教授 森 樹男 柴田学園大学生活創生学部 助手 齋藤 望		
	 【1コマ目】9時30分~11時00分 ・担当教員及びグループ内で自己紹介 ・ライフステージ別の健康と食の問題について ・生活習慣病予防での大事な体重管理と食生活について知る(量・バランス・時間) 【2コマ目】11時10分~12時40分 ・食は近の自己が使なまま、(食は近ままのなる)(また) 		
授業の流れ	 ・食生活の自己評価をする(食生活チェックシート) ・評価表を見ながら、食生活の問題点を書き出す ・食生活の問題を改善しようとした時に、障害になることがないかを考える ・食生活を改善する意欲も大切なことに気づく ・グループ内でどんな問題があったかを共有する 		
リスポップが収入し	【3コマ目】13時30分~15時00分 ・13時30分~13時45分(15分)前田先生 地域の健康課題を考える上での視点について ・13時45分~14時45分(60分)ゲストスピーカー 櫻庭 智之氏 弘前市の取り組みと食育に関して ・14時45分~15時00分 弘前市の実態を踏まえて、4コマの演習内容の通知		
【4コマ目】15時10分~16時40分 いろいろなライフステージの健康づくりを目指して、食生活を改善するため 弘前市に「あったらいいな」と思うサービスを考える			

【5コマ目】16時50分~18時20分

- ① ペア決め、意見の交換
- ② 考えたサービスの内容をブラッシュアップする
- ③ 全体での発表
- ④ 教員からの講評
- まとめ (前田先生)

~講義の様子~

アイスブレイクの内容に ついて説明する前田先生



~アイスブレイクの様子~



グループワーク中の 学生にアドバイスを する前田先生

授業の様子

自己紹介をする学生





ビタミン C の含有量を 調べる実験

~実験の様子~









授業の様子

話し合いをする学生。簡単な実験ということもあって、和気あいあいとした雰囲気で行われていた

~ゲストスピーカーによる講演の様子~





グループワーク:弘前の健康づくりの「あったらいいな」を考える



模造紙にアイデアを書 いた付箋を貼っている



授業の様子



他のグループとの意 見交換



~発表~

本日の講義内容や、グル ープ活動を踏まえた発表 を行う学生







授業の様子

~本日の授業の講評を行う森先生(左)と前田先生(右)~





2日目の授業は、「食」の観点で健康について考える授業が行われた。学生自らの健康について考える機会があり、その活動を基にグループワークが行われていた。

グループワークでは自己紹介をした後に、前田先生から出題された栄養に関するクイズを行い、クイズ終了後は、食材ごとのビタミン C の量を調べる実験を学生は互いに協力しながら行っていた。初日の授業時とはグループが変わっていたのだが、活動自体が2日目ということもあり、全体的にリラックスした状態で臨めていたのではないだろうか。また、グループワーク中に学生の様子を見守るために近くに来た前田先生にアドバイスを求めて話をしている場面も多く見受けられ、良い雰囲気で授業が進んでいた。

まとめ

2コマ以降では、自らの食生活を省みて、改善出来る点がないかをグループで 共有する活動や、ゲストスピーカーによる弘前市の食育についての取組みについ ての講義、それらを踏まえて地域の健康作りにはどのようなサービスが必要にな るかを考え、パワーポイントにまとめて発表する活動が行われた。

本日の授業やグループワークを通して、学生は自らの食生活の問題点や、青森 県の平均寿命が短いことの要因などを学んで、これから暮らしていく街がどのよ うにすれば健康に気を遣うようになるのかについて考える事が出来たのではない だろうか。グループ活動のまとめとなる最終発表についても、どのグループも地 域に根ざした健康課題に対する独創的な取組みを提示していた。この活動によっ て、学生は自らが当事者として向き合っていかなければならない健康課題という こともあり、この先の食生活などを真剣に考える良いきっかけになったと言える。

(3)8月24日(木)

テーマ	地域の情報発信について
概要	情報機器が発展したことで、現代では、日々、様々な形で情報が行き来している。人々は、気軽に、自由に、簡単に情報を送受信することができるようになったが、この情報の送受信について改めて意識的に考える機会を持つことは、情報の送受信に関する手段やルールについて理解を深めるだけでなく、言語の使用について考える機会を得られる点からも有用である。本授業では、地域の情報発信をベースにして、実際に発信されている情報やその手段などについて学び、意識的に考え、工夫して情報発信するということを考える。そして情報発信に対する理解を深めるとともに、言語使用について考える力を身につけるための機会を設ける。
担当教員	弘前学院大学文学部 講師 齋藤 章吾
ゲスト スピーカー	弘前市広聴広報課 太田 耕介 氏

協力 教職員等	弘前大学人文社会科学部 教授 森 樹男
	【1コマ目】9時30分~11時00分 ・地域の情報発信(講義) ①自己紹介・アイスブレイク 身近なものから全国的なものまで、最近印象に残ったニュースについて 「どのようなニュースをどのようにして知ったのか」を話し合う。 ②グループで共有 最近印象に残ったニュースについて情報の性質ごとに分類する作業を行う。またそのニュースが印象に残った理由についてグループ内で話し合う。 【2コマ目】11時10分~12時40分 ・様々な情報発信の形(講義) 地域における情報発信の媒体や内容について説明する。
	【3コマ目】13時30分~15時00分 ・弘前市の事例 弘前市広聴広報課 太田 耕介 氏 ①広聴広報研修の内容 (講義) ②弘前市の情報発信の具体例 (講義)
授業の流れ	【4コマ目】15時10分~16時40分 ・地域・あるいは大学などの情報発信について考える・情報発信のための資料 等を作成する活動 ①情報発信に関する課題の提示(講義) ゲストスピーカーが話した内容に関連した課題を提示する。 ②言語学的知見に基づく情報発信のポイント(講義) 語用論などの観点から情報発信に必要な視点を導入しながら、情報発信
	のポイントについて説明する。 ③課題に対する情報発信の具体案の作成(演習) 提示された課題に対して適切なトピックを選び、情報発進の具体案を考える。実際に、SNSの使用案やポスター・チラシ、ウェブページのデザインに関する案などを作成する。
	【5コマ目】16時50分~18時20分 ・発表と検討 ①発表・グループ間での検討 地域の情報発信について講義で学んだことをもとに課題に対しての具体 案をグループごとに発表する。 ②質疑応答 ③講評・総括

~授業についての説明~

「地域の情報発信について」 を担当する齋藤先生が講義の 流れについて説明



~アイスブレイク~

授業の様子



最近印象に残ったニュース について話し合う学生達

自己紹介の内容

- ・挨拶
- ・名前
- 所属大学
- 最近のニュース



~講演~



「地域の情報発信」というテ ーマで講演を行う齋藤先生

弘前市の情報発信の事例 について講演する太田氏



授業の様子

~グループワーク~





弘前市の情報を誰にどの媒体を使ってどのように工夫して発信するのか、これまでの講演内容をもとにグループで情報発信のための資料等を作成する学生

~発表~





グループで話し合われた内容をパワーポイントにまとめ発表する学生 例) 弘前市の春夏秋冬の魅力を伝えるアニメーション







それぞれのグループの発表が終了した後、自由に他のグループの案を見て 周り、7班の発表が受講生から高い評価を受けた



学生の発表に対してコメント する齋藤先生 3日目の講義では、講師の齋藤先生と弘前市の太田氏が、それぞれ地域の情報発信の現状と背景、弘前市の事例に基づいた情報発信の形について講義しており、学生はさまざまな視点から地域の情報発信について考えられる機会となった。

まとめ

はじめ、学生は緊張した面持ちで待機していたが、最近の印象に残ったニュースの話し合いを通じて、緊張が解け笑顔で会話している様子が見受けられた。

太田氏からは、「弘前市の情報発信の事例」というテーマで、弘前市が現在行っている取り組みをもとに情報発信の様々な形について講義していただき、そのなかで弘前市の現状や課題について、実際の体験談等を含めたエピソードを聞き、学生は地域における情報発信の形のイメージを掴んでいた。

午後から行われたグループワークでは、弘前市の情報発信の事例などをもとに、弘前市の情報を誰にどの媒体を使ってどのように工夫して発信するのかを グループ内で意見交換した後、パワーポイントにまとめて発表を行なった。

3日目の講義は、グループワーク中心の講義であったため、学生はグループメンバーと談笑を交えながら地域の情報発信について活発な議論を行っていた。

5. 単位認定者

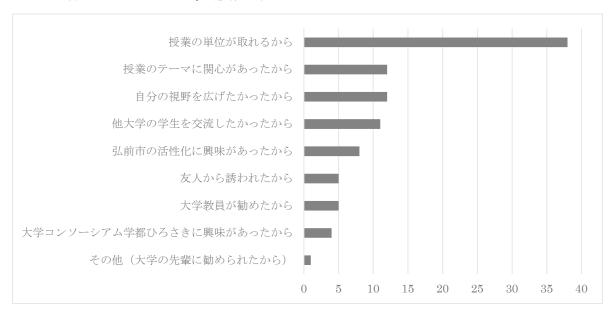
○弘前学院大学:16名○柴田学園大学:34名○弘前大学:2名

6. 授業アンケート

- ○アンケート実施日 8月24日(木)
- ○回答者数/出席者数 44名/52名
- ○回答率 84.61%

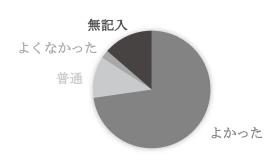
【今年度の各授業について】

○なぜ授業に参加しましたか。(複数回答可)



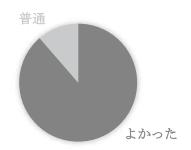
○1日目テーマ「学校と地域社会が連携した健康づくりを考える~弘前市の児童生徒の健康診断 結果と健康課題から~」について

	回答数
1. よかった	3 2
2. 普通	5
3. よくなかった	1
4. 無記入	6
計	4 4



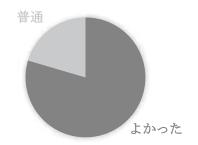
○2日目テーマ「地域の健康課題と食生活」について

	回答数
1. よかった	3 9
2. 普通	5
3. よくなかった	0
計	4 4



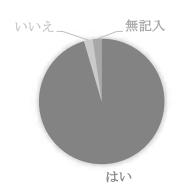
○3日目テーマ「地域の情報発信について」について

	回答数
1. よかった	3 5
	9
3. よくなかった	0
	4 4



○授業を通して地域の課題に興味を持ちましたか。

	回答数
1. はい	4 2
2. いいえ	1
3. 無記入	1
計	4 4

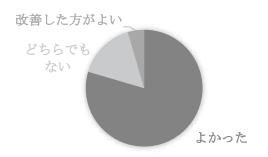


○あなたが考える地域の課題を記入してください。(一部抜粋)

- ・若者の地域活動への消極性
- ・弘前市に高いビルや都会にあるお店が増えてきて、歴史的建造物が埋もれてしまうのではな いかという不安
- ・色々な人が健康に関する話題に関心が薄いこと。自分の健康状態を知らない。
- 若者が少なくなっていること
- ・少子高齢化社会が進む今、高齢者が過ごしやすいまちづくりにすることに力を入れるべきだと考える。 交通機関の整備や定期的に家に訪問して健康状態を確認するなど福祉に対する 政策が大事だと思う。
- ・子どもの肥満率の高さ。
- ・若者の減少、 職場の減少
- ・農業・伝統工芸品・ねぷたなど地域の一つ一つの強みはあるが、受け継ぐ人がいないこと。
- ・他県へ弘前市の魅力をもっと発信するべきであるということ。

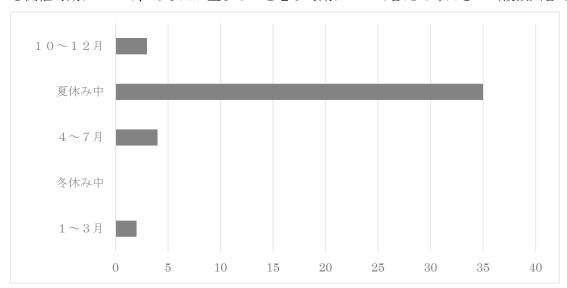
○グループディスカッション・発表の時間割り振り等について

	回答数
1. よかった	3 5
2. どちらでもない	7
3. 改善した方がよい	2
計 計	4 4

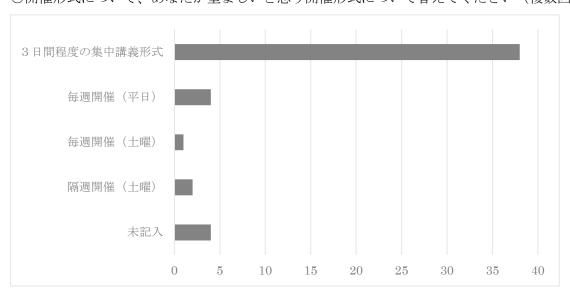


【来年度の授業について】

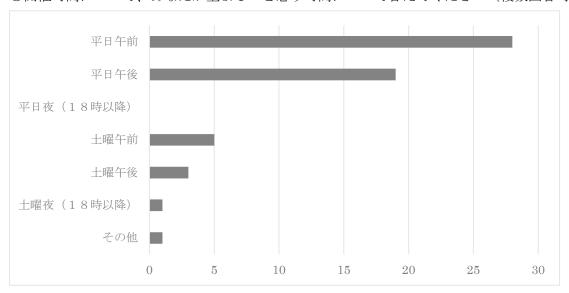
○開催時期について、あなたが望ましいと思う時期について答えてください(複数回答可)



○開催形式について、あなたが望ましいと思う開催形式について答えてください(複数回答可)

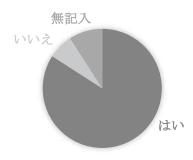


○開催時間について、あなたが望ましいと思う時間について答えてください(複数回答可)



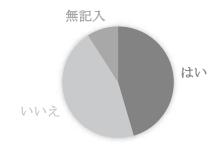
○今回の講義内容・形式の場合、同級生や後輩に勧めますか。

	回答数
1. はい	3 7
2. いいえ	3
3.無記入	4
計	4 4



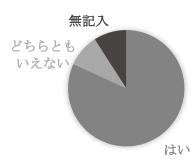
○これまでに他大学の学生と、授業や課外活動などを通じて、交流を図ったことはありますか。

	回答数
1. はい	2 0
2. いいえ	2 0
3. 無記入	4
計	4 4



○今後も他大学の学生と交流を図っていきたいと思いますか。

	回答数
1. はい	3 6
2. いいえ	0
3. どちらともいえない	4
4. 無記入	4
計	4 4



○授業の感想や要望、意見等(一部抜粋)

良かった点 :授業で他大学の学生と関わることがほとんどなかったので話を聞けたりでき

たし、自分の大学の授業だと徐々に人が固定されてくるので新鮮でした。

良くなかった点:グループ活動を行う際にアイスブレイクを行うまでは良かったが、グループ活動

の目的がいまいち分からず、話し合うまでに至らなかったなと感じています。

良かった点: 僕は自分から人と関わりを持とうとするタイプじゃないので、人と関わるいい機

会だった。すごく楽しかった。

良くなかった点:特になし

良かった点:他校と楽しく考えて交流できた

良くなかった点:なし

良かった点:各自でグループが変わったため、グループワークが多かったため

良くなかった点:大学が偏っていた。せっかく他大学生との合同授業なのでもっとグループワーク

が活発であって欲しかった。各班にサポートのメンバーがいてもよかった。せっ

かく各大学から集まったので、もっと弘前ならではの問題を取り上げるのもよい

良かった点: 私は、青森県の健康課題を弘前市をピックアップしたデータや取り組みをもとに

知ることができたことが良かったと感じた。また、グループワークなど他大学との交流もあり、3日間が充実して良かったと感じている。考えや視点が異なるこ

とで広い視野で課題のテーマについて考えることができ、楽しかった。

良くなかった点:特にありません

良かった点:プレゼンカ、コミュニケーション力を養える点、地元の問題意識につながる点

良くなかった点:時間が長すぎる、集中が途切れるので省略できる部分は削るべき

良かった点:グループディスカッションを通して交流もでき、自分では思いつかないことも得

られた。班によって意見も違うので、いろんな話を聞けて面白かった。

良くなかった点:なし

良かった点: 最後のコマでグループの意見を発表することにより、しっかりグループで話し合

うことができた。

良くなかった点:なし

良かった点: たくさんの人と意見交換できた・3つの分野での大切なことを学べた・実際に体

験できた

良くなかった点:1日が長く感じた

良かった点: 大学の授業では知り得ない深い所を知ることができたことが良かった。他大学の

年上の方がとても話し合いや発表にとても慣れていらっしゃってとても勉強にな

った。1日目の子どもの健康についてがいちばん興味を持てた。

良くなかった点:自分から発表をあまり率先して出来なかった。

7. 授業の成果

今年度は、「学校と地域社会が連携した健康づくりを考える~弘前市の児童生徒の健康診断結果と健康課題から~」、「地域の健康課題と食生活」、「地域の情報発信について」の3つのテーマで開講し、3日間とも趣向を凝らしたプログラムとなった。

受講した学生からは、「他大学と交流することにより普段の授業では発見できない新しい知見を 広げることができた。」「健康診断や食生活チェックにより自分自身の体について知ることができ た。」「地域の情報発信について弘前市の事例を踏まえながら学ぶことができた。」「普段の講義 では触れられない地域の課題を他大学の学生と考えることができて良かった。」という感想がよ せられた。普段の授業では学べない専門外の内容や、他大学・他分野の学生を交えたグループディスカッションによって、講義を聞いているよりもコミュニケーションが取れ交流を深める良い 経験となり、学生の自発性や自己啓発を促すことができた。

8. 次年度開講に向けての課題

講義当日は、欠席者や履修取り止めした人がいたため、各班のグループ人数に差が出てしまった。次年度は、授業が始まる前に欠席者や履修取り止めした人の状況を把握し、グループ編成を見直せるようにすることが課題として挙げられた。

さらに、アンケート集計を行う際、回答する媒体が紙であると打ち込み作業やグラフの作成など手間が増え非効率であるため、Google Form など効率的にアンケートの集計ができる媒体に変更することが改善点として挙げられた。

編集

- ①大学コンソーシアム学都ひろさき 事務局
- ②インターンシップ学生

上野矢 幸起(弘前大学)嶋原 圭吾(弘前大学) 須見 和幸(弘前大学)羽賀 悠人(弘前大学)

インターンシップ受入

1. 概要

○目的

具体的な事業運営を通じて、学生の企画立案力やマネージメント力を養うことに加え、自 治体と大学コンソーシアムが連携することの意義を模索し、地域課題の把握、地域志向力の 向上を目指す。

○業務内容

大学コンソーシアム学都ひろさきが主催する、集中講義「共通授業」の運営業務

- ・事前準備・当日運営・授業終了後処理
- ○受入人数

弘前大学学生 4名

○期間及び時間

令和5年7月31日(月)~8月31日(木) 合計78時間

2. 業務内容

(1) 事前準備

ガイダンス、名刺作成、挨拶まわり、共通授業会場下見、関係者による全体打合せ参加、授業 の準備等



挨拶まわりの様子



共通授業に向けた 書類作成の様子



「共通授業」打ち合わせの様子



会場設営、準備の様子

(2) 当日運営

受付、授業の補助等



受付をする様子



授業内容をメモする様子



実験の補助をする様子



打ち合わせの様子



実験の準備をする様子



授業風景の撮影をする様子

(3) 授業終了後

報告書の作成、インターンシップ終了報告



インターンシップ生と事務局の方々

(4) インターンシップ参加学生の感想

○弘前大学人文社会科学部社会経営課程企業戦略コース3年 上野矢 幸起

大学コンソーシアム学都ひろさきの約1ヶ月間に渡るインターンシップの活動を通して、私自身、大変貴重な経験をさせていただきました。

具体的には、弘前市内の3大学合同で実施される共通授業に向けて、より授業全体が円滑に進むように準備・運営を行いました。また、共通授業後には履修者に記入していただいた授業評価アンケートをもとに、来年の共通授業に向けて改善点をインターンシップ生同士で出し合いました。その中で、1つの授業を実施するだけでも講師の先生や弘前大学事務局の職員、弘前市民文化交流館ホールの管理者など弘前市で活動されている多くの方の協力を得て実施されているのだと実感することができました。

また、社会人として基本的なスキルについても学ばせていただきました。挨拶回りでは、社会連携課の方と実際に自身で作成した名刺で名刺交換を行い、社会に出る実感が湧きました。準備作業では Word と Excel を用いたため、効率の良い編集能力を身につけることができました。

最後になりますが、約1ヶ月という長い間インターンシップ生として受け入れて下さった弘前 大学事務局の今井さん、天坂さん、ありがとうございました。常にこちらを気にかけて下さり、 どんなに些細なことでも分からないことがあれば丁寧に教えていただきました。そのおかげで、 私自身、気負いすることなくインターンシップの活動を行うことができました。本当にありがと うございました。

○弘前大学人文社会科学部社会経営課程企業戦略コース3年 嶋原 圭吾

本インターンシップでは、「共通授業」に必要な準備及び運営、報告業務を行なった。具体的には、「共通授業」会場の下見を行なったり、「共通授業」における講師の先生方との打ち合わせを行なったりという準備を担当した。また、「共通授業」の会場であるヒロロ 4F 市民文化交流館ホールの下見や会場設営も準備業務として行なった。さらに、「共通授業」の運営業務では、会場へ訪れる履修者に出席票の記入や配布資料の受け取りを促したり、「共通授業」報告集に記載するための画像の撮影や講義内容の記録を行なったりと幅広い内容の業務を行なった。そして、「共通授業」の報告業務として、報告集の作成を行なった。

準備として行なった「共通授業」の講師の方々との全体打ち合わせでは、講師の方々からグループ分けを13班へ変更することや、1コマ目で使用する野菜や果物の入ったカゴを講義参加者に配布することなどが希望として出された。これらの希望に対して、我々インターンシップ生で工夫を凝らし、対応することができた経験は社会で働くにあたって大きな糧になると感じた。この後の「共通授業」の運営においては、授業当日に講師の方から急遽出された要望に対応したり、授業が円滑に進むようなサポートを行なったりと主体的に活動することができた。「共通授業」の報告業務においても、「共通授業」について深く理解することができるような報告集の作成をすることができた。

総じて、このインターンシップを通して、社会人基礎力の成長を得ることができた。準備・運営・報告業務と「共通授業」に関する一連の流れを担当することができたこの経験は、就職した後、何らかのプロジェクトを担当する際に大きな経験となると考えられる。

○弘前大学人文社会科学部社会経営課程企業戦略コース3年 須見 和幸

大学コンソーシアム学都ひろさきでの、約一ヶ月のインターンシップは大変貴重な経験を積ませて頂くことができました。今回のインターンシップを通して、自身の課題や強みといったものを自分なりに把握することができました。また、大学の教授などが一つの講義を行う裏で、どの様な準備をしているのかその大変さの一部だけでも知ることができました。

実際のインターンシップ内容である共通授業の準備・運営では、自分の PC スキル向上や社会人としての心構えなどを学ばせていただきました。特に、共通授業の準備では、様々な書類作成を行いエクセルなどのオフィスソフトを用いて仕事をしていきます。このときに、大学の授業で使わないような機能まで使うことができ、自身の PC スキル向上につながりました。また、全体打ち合わせで各講義担当の教授方と、どのように講義を進めていくのか、講義で何を学ばせたいのかなどのお話を聞かせていただくことができました。この打ち合わせの中で、参加教授の方々とお話させていただき社会人としての心構えを学びました。共通授業当日の運営では、共通授業がスムーズに進んでいくように裏方の仕事を着実にこなし、今何をしたらいいのかを自分で考えながら動くことの大切さを学びました。また、共通授業に参加している学生が講義に集中することができる環境づくりなども自分はどうしたらいいのか考えさせられました。

最後に、約一ヶ月という長い期間のインターンシップを受け入れてくださりありがとうございました。この一か月間の経験で自分の至らない所を再確認し、自身の成長につなげることができました。そして、これは大学コンソーシアム事務局の皆様がやさしく的確な指導をしてくださったからです。本当にありがとうございました。

○弘前大学人文社会科学部社会経営課程企業戦略コース3年 羽賀 悠人

今回、大学コンソーシアム学都ひろさきのインターンシップでの活動を通して、実際に経験しないとわからない事や、自分の課題について知ることが出来ました。また、普段受けている授業は多くの方の尽力があって成立しているということや、事前に緻密な準備が行われていることを学びました。

私たちは共通授業の運営側として、資料作成や会場設営などの業務を体験させていただきましたが、わからない点や作業の流れなどは前もって丁寧に教えてくださったので、程良い緊張感で取り組めたのではないかと感じています。また、事務局で行った作業についても、他のインターンシップ生と役割分担などをして進めることが出来ました。特に印象に残っているのは、エクセルを用いて共通授業の履修者のグループ分けを行ったことです。エクセルに不慣れだったということもあり、多くの時間の要する作業になりましたが、社会人になる前にこのような事務作業に取り組む経験が出来たことは良かったです。

他にも、名刺交換などの社会人に必須のマナーも教えて頂きました。実際に名刺交換をする機会もあり、その際の所作などを身につけることが出来ました。

最後に、私たちインターンシップ生を受け入れてくださり、細かい点まで親切に教えてくださった事務局の天坂さん、今井さんには心より感謝申し上げます。至らぬ点も多かったかと思いますが、今回の経験を今後に活かすことが出来ればと思います。大変お世話になりました。

3. インターンシップ受入の成果

今年度は、弘前大学の学生4名をインターンシップで受け入れた。社会人の中に踏み込むことは、学生には緊張する場面でもあるため、始めは馴染めるかどうか事務局側としても心配はあったが、学生自身の向上心や成長が著しく、自然と良い関係を築くことが出来た。

特に共通授業に主催者側として参加することにより、自分達が普段受けている側の授業の裏では、様々な人の協力があること、準備にも時間がかかることなど、貴重な社会体験をすることが出来たと、インターンシップ生自身も感じることが出来ていた。

学生地域活動支援事業

1. 学生地域活動支援事業とは

学生が企画立案したまちづくり、地域づくりの活動に係る経費の一部を支援する公募型の事業である。地域課題の解決や地域の活性化に繋がる活動を支援し、学生による魅力あるまちづくりの推進を図ること及び地域活動を通じて、学生が地域の一員としての社会的力量を形成することを目的に実施する。

一定の申請条件を満たせば応募でき、応募された活動は本コンソーシアムが実施する審査を経て助成を決定する。

2. 各採択団体、事業及び実績報告

(1)地域活性化サークル(弘前学院大学)

1 事業名称

大学キャンパスを使用した稔町町内会との合同イベントの開催

2 事業実施概要

①実施した事業の概要

大学生と地域住民との関係が少なくなっており、学生と地域住民との関係性の構築を目指 し、稔町町内会と協力して、町内の秋祭りという形で弘前学院大学文化祭の日に一緒に開催 した。会場に大学キャンパスを使用した。

これにより、若者と地域住民とのつながりを形成することができ、町内のイベントを行う ことは地域の活性化にもつながると考えた。当初、露店とキッチンカーの参加を予定し進め ていたが、文化祭との同時開催にしたことと、学生の露店を優先する、ということで今回は 露店商業組合とキッチンカーは参加しないこととした。

②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか

地域の飲食店を知らない、地域の特産物を知らない、イベント等に興味がない学生が多い。 このような中で、大学周囲であっても地域住民との関係性は著しく希薄化していることが課題であると考えている。町内会との合同のイベントを通して地域との交流の機会になることを目的として実施した。

③どういった活動が地域活性化につながると考え実施したか

大学を使用することで、稔町町内会の住民は大学自体に触れあう機械も増え、イベントを 通して学生と地域住民との関係性の構築につながる。また、地域のことを知らない学生が増 えていることは、地域に対する興味を持つことがなく、地域の良さを知ることも無い。この ことにより、若者はどんどんと県外に出ていくことにもつながると考えられる。青森県の人 口は年々減少傾向にあり、弘前も同様である。大学のキャンパスを使用することは高校生等 が地域の大学に興味を持つきっかけの一助となることも考えた。

④事業を成功させるために何を検討し実施したか

大学と露店商業組合との日程調整を先に進めた。また、大学のキャンパスを使用可能な日程を決めることについても事務と複数回やりとりを行った。

日程等の都合もあり、弘前学院大学の文化祭の日程(10月8日)に同時開催することと した。露店商業組合、キッチンカー(きむらや)との打ち合わせをすすめ、協力の承諾を得 た。町内会にポスターや宣伝をしていただき、町内からもどのような協力が可能かを相談し、 こちらも複数回打ち合わせを行い、町内の2店舗(福田もちや、たけや)の協力を得た。

⑤事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

アンケート結果でも参加者、町内の2店舗からはおおむね満足という結果であり、地域住民と学生との交流の機会にもなったと捉えられた。弘前の文化や飲食店とのつながりについては、露店商業組合の参加がなくなったことで達成できなかった。しかし、町内の店舗に参加して頂いたことで学生が地域に目を向ける機会になったと考えられる。さらに、うどん作りの際にも、うどんを作成しながら学生、一般の方、「たけや」の方と交流しながら行うことができていた。

3 事業実施報告

①具体的な事業報告・方法

弘前学院大学のキャンパス内で10月8日に行った。単独の開催とはせず、弘前学院大学の文化祭と同時に開催した。稔町町内会を含む地域の方々が学生とのつながりを形成することを目的とした。町内会のブースにも多数の方が参加していた。内容は、輪投げ、ボールすくい、うどん作り、お餅の販売を行った。露店とキッチンカーの参加は今回行わなかった。いくつかのイベントに参加した子供と保護者、学生にアンケートを行い、5組の回答を得た。満足度を3段階で評価して頂き、1名が普通だったが4名が満足と回答しており、満足度は高く、地域交流の場になったかについては、「はい」が3名、「わからない」が2名で、今後も参加したいが5名、というアンケート結果を得た。

また、協力して頂いた稔町町内会の福田もち店とたけやさんにアンケートを取り、満足1名、普通1名、交流の場になった、今後も参加したいについてはともに「はい」の結果を得た。

フリーコメントでは、「子ども達にとって参加して楽しめる企画があることで親としては子ども達を誘いやすいです。このたびはとても楽しませてもらえて感謝でした。親子共々楽しい思い出となりました。」、「稔町町会は老人が多いので参加してくれる店舗を増やすなど、町会の人がもっと参加してくれてもいい」、「どんなお店があるのかを学生や町内以外の人も知る機会になったと思う」、「もっと全学部の方の参加が欲しい。来年もよろしくお願いします。(稔町々会)」などの意見を頂いた。

輪投げ、ボールすくいを含むブース全体は80名程度の参加、うどん作りは8名(定員が8名)が参加と参加状況は良かった。

②構成員の具体的な人数や役割

当日のブースの担当者4名の学生、うどん作りを麺ぼうたけやさんが担当した。

事業全体の統括、広報、経費管理はサークルの学生のうち約4名が先になって準備を行った。

大学の事務を含む大学関係者との連絡調整、近隣の商店街・キッチンカー・露店との連絡や協力の可否の確認、町内会との連携、日程調整、ポスター作製を教員と協力しサークル学生が担当した。

③実施スケジュール

- 5月下旬~ 大学キャンパスの使用の有無の確認を行った
- 6月~8月 町内会や露店商業組合、キッチンカー等に連絡、打ち合わせ
- 10月 町内会とのイベント(弘前学院大学の文化祭に参加する形で開催した)
- 12月 関係者へ実施後のアンケートの依頼・分析

4 補助金による支援の効果

ポスター等による宣伝、当日の準備等に使用させていただき、集客を含め成功した。

5 反省点・改善点

宣伝の費用のみを考えていたが、輪投げ、ボールすくい、うどん作りの準備などにも費用が 発生し、部費を使用した。予算を申請する段階で準備にかかる費用も再検討する必要がある。

町内の方がイベントに協力しやすい体制が必要である。今回は副会長との打ち合わせがメインだったが、例えば町内全体との打ち合わせ等を行うことで町内の方への協力を依頼できるかもしれない。

また、他の町内と合同で行うことも可能かもしれない。このことにより、広く参加してもらうことができる。

ポスターを近隣の小学校にもお願いするべきであった。

6 特記事項

当初は、文化祭との合同開催ではなく、単独での開催を予定していた。日程調整の関係で文化祭との合同開催となった。しかし、文化祭との合同開催にすることでより集客がしやすく、学生の参加も多かった。また、地域住民の参加も多かったため、文化祭との合同開催は結果的に良かったと言える。

7 事業実施時の写真



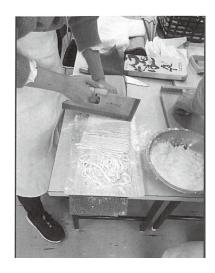


たけやのご主人とサークル学生が準備をしている写真、ボールすくいをしている子供と学生





ボールすくいの横で福田もちやの販売に並ぶ一般の方、輪投げに参加してくれた子供達





うどん作りに参加した学生とたけやのご主人

(2) ヒロガクインクルージョンネットワーク(弘前学院大学)

1 事業名称

多世代交流を通して家でも職場でもないもう一つの「居場所」を創ろう

~縁 (えん) でね。「わ」と「な」が繋がる「ヒロイン」だはんで~

2 事業実施概要

①実施した事業

【多世代交流事業】

地域でつながりを喪失しやすい高齢者やその家族が、分野や世代を超えて多様な地域住民 とつながることができる多世代交流の場を、関係機関や地域の方々と協働を図りながら創出 することを目的とした事業を実施した。

今回申請額より使用額が大幅に下回った理由として、大きく2点の要因があった。1つ目

は、ポスターやチラシなどの印刷物をコピー機と手作業で行ったためである。当初は、印刷代のコスト削減を意識しての対応であったが、印刷部数や様式の大きさ、印刷物のクオリティーなどが格段に低下したため集客状況に大きく影響した。2つ目は、複数回の企画を実行したため、一つ一つの企画に対しての企画費を低コストに抑えようとしたためである。企画の内容も「交流」をメインとして考えていたため、参加者同士の「会話」が中心になるような簡単なゲームやものづくりを行うことでゆったりとした時間の中で交流を楽しめる空間づくりをした。

②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか。

高齢者や障がいがある方々は、地域のなかの多様な社会的バリアによって、自らの声を身近な人や地域社会に伝えることが難しい状況におかれていることが考えられる。このような社会的バリアの解消には、市民が高齢者や障がい者等の声や姿に日常的に触れる"場"が必要と考えた。青森県でも社会課題とされる地域のつながりの希薄化は、社会に参加をしたいと思っているにもかかわらず、それを発揮する場の少なさとそのアクセスの困難さが要因となっていると考えられる。コロナ禍において地域活動が制限されてきたなかで、改めて社会的な繋がりの必要性を感じている。同じ地域で生活する多くの人と交流することは、特定の人の生活課題を「我がごと」として捉えるきっかけになるのではないかと思う。また、それを実現する取り組みとして、多世代交流の場は有効な活動と考えた。

③どういった活動が地域活性化につながると考え実施したか

"場"を創設することが地域活性化に繋がると考える。この"場"は、特定の人に限定された場ではなく、世代を超え、同じ地域でともに生活する人が集い、交流できる場であることが重要である。この「多世代交流の場」は、高齢者や障がい者のためだけの場ではなく、地域のすべての人が集い、交流し、相互に支え合う場であり、このような新たな支え合いの場を地域に創ることは、地域共生及び地域活性化につながると考えている。

④事業を成功させるために何を検討し実施したか

地域住民が実際に何に困り感を抱え、地域に求めているのかという地域住民の「声」を聞くために、アンケート調査やヒアリング調査を通して、地域住民の声を把握をした。大学生がどのようにして地域住民の声を聞き、地域住民が抱える困りごとを把握することができるかを考え、アンケート内容やヒアリング内容を検討した。

また、アンケートで得た地域住民の「声」を学生同士で振り返り、次回の開催に活かすことで、より地域住民に寄り添った企画を考える事ができた。

ヒアリング審査時のコメントについては事業の目的が明確ではないという指摘や高齢者と 大学生の間の世代も参加し、層をもっと重層的にしてみてはどうかという指摘があった。

この事業の一番の目的は、地域住民の社会参加のきっかけの場を作ることである。この場は、幅広い世代が集う空間であり、そのためには市民会館で事業を実施することにより、市民が集まりやすい場を創出できるのではないかと考え再検討した。また事業内容も層を重層的にするために、世代を問わず楽しめるものがよいのではないかと考え、企画を再検討した。高齢者や地域住民に対しアンケート調査やヒアリング調査を通して、今回の事業に必要な地域住民の「声」を抽出し事業内容を再決定した。

④事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

1. 第1回 あずましの集い

開催地:サンタハウス弘前公園 交流スペース

実施名:「頭と身体を動かそう」

実施目的: (1) 参加者の心身の健康維持・向上、学生の高齢者理解

(2) 参加者と学生で関係性を築くことで、今後の活動への先駆けとしたい。

実施内容:ペーパータワー、風船バレー

参加人数:18人(内学生 8人)

イベントの総合的な満足度



■満足 ■まあ満足 ■普通 ■あまり満足ではない ■満足ではない ■40代 ■50代 ■60代 ■70代 ■80代 ■90代以上

参加者別年齡



【参加者の声】

- ・楽しかった。また参加したい。 (複数回答)
- ・年代に合ったイベントで良かった。
- ・体を動かすことができ、楽しかった。

【成果・改善】

(成果)

- ・参加者もヒロインメンバーも笑顔でいれる、いい空間をつくることができた。参加者の 中には、見学だけで楽しかったと言ってくれる方がいた。
- ・参加者から「また参加したい。」という声が多かったため、事業の継続性・将来性が見 えた。
- ・入居者同士の声掛けにより参加を決めてくれた方もいるため、地域においても住民同士 の声掛けによる社会参加が必要だと実感した。

(改善)

・アンケート調査において、「横文字が分からない」「文字が小さくて見えない」などの 意見があったため、次回からのアンケート調査では分かりやすい単語を用いて、文字を 大きくするなどの改善を行う。

2. 第2回 あずましの集い

開催地: 弘前市民会館 大会議室(1F)

実施名:「今の遊びと昔の遊びをみんなで楽しもう!」

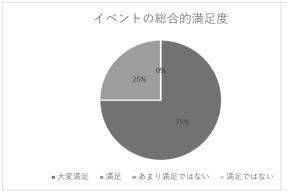
実施目的: (1) 参加者の心身の健康維持・向上、学生の高齢者理解

(2) 地域住民が参加しやすい場所で活動を行うことで、世代を超えた場の創出を行う。

実施内容:スタンプラリーを用いて、今と昔の遊びを体験できるゲーム。

- ①わなげ
- ②巨大福笑い
- ③めんこ(※難易度が高いことを考慮し、代案としてスリッパ投げも実施。)
- ④魚釣り
- ⑤ビリヤード
- ⑥宝さがし

参加人数:28人(内学生 16人)



参加者別年齡 8.30% 8.30% 0% 8.30% 0% 8.30%

■~10代 ■20代 ■30代 ■40代 ■50代 ■60代 ■70代 ■80代 ■90代以上

【参加者の声】

- ・孫とイベントに参加できてよかった。
- ・若い方々と交流できてよかった。
- 子どもの頃にやったゲームがあり、懐かしかった。

【成果・改善】

(成果)

- 年代が偏らず、様々な世代が楽しめる場となった。
- ・学生と参加者だけでなく、参加者同士での会話も自然と生まれていた。
- ・場所をサンタハウス弘前公園の共有スペースから弘前市民会館にしたことで、参加する 年代層の幅が広がった。

(改善)

開催日が中体連などと重なったり、集客方法がポスター掲示だけであったため、集客が伸びなかったと考える。そのため、開催日の見直しや集客方法をポスター掲示だけでなく応募フォームを作ることで改善した。

3. 第3回 あずましの集い

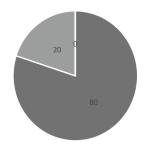
開催地:サンタハウス弘前公園 交流スペース 実施名:「クリスマスポストカードを作ろう!」 実施目的: (1) 参加者の心身の健康維持・向上、学生の高齢者理解

(2) 少人数で行うことで、会話を中心として交流する

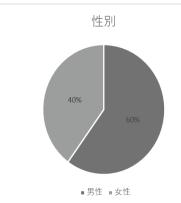
実施内容:クリスマスポストカードの作成

参加人数:10人(内学生 5人)





■大変満足 ■満足 ■あまり満足ではない ■満足ではない



【参加者の声】

- ・若い方たちとの交流は、楽しい。
- ・学生の気遣い・声掛けが嬉しかった。
- ・笑い声の中で楽しい時間を過ごすことができた。
- また会いたい。(複数回答)

【成果・改善】

(成果)

- ・ゆったりとした時間の中でものづくりを行い、「会話」を中心に交流することができ た。
- ・ものづくりを通して共通の話題ができ、会話が弾みやすくなった。
- ・会話の多い方が、満足度が高くなるのだと感じた。

(改善)

・応募フォームを作成したが、利用率が0%であったため他の方法による集客が必要だと 考える。

以上の点を踏まえ、今回の事業で得た成果として、地域住民の社会参加のきっかけを作ることができたと感じた。アンケート調査による「イベントの総合的満足度」は高い数値を示しており、普段関わることのない世代と交流できる機会は、参加者また学生においてもとても意義のある時間であったと振り返る。しかし、弘前市民会館以外での開催は年代が偏ってしまっていた。また、どの事業を通しても集客方法に課題があると感じた。そのため、次のステップとして以上の点を改善することで、多世代交流に繋げていきたいと考える。

3 事業実施報告

①具体的な事業報告・方法

(1)場所:地域住民がアクセスしやすい公民館など

(2) 対象:地域に住む高齢者、地域住民など

(3)参加人数:上記照合

②構成員の具体的な人数や役割

事業統括者:加藤璃慧

事業統括補助者:安田由香•齊藤帆南

事業運営スタッフ:ヒロインのサークルメンバー 広報担当:安田由杏、経費管理担当:齊藤帆南ほか

②実施スケジュール

5月下旬 サンタハウス弘前公園施設長との打ち合わせ ヒアリングやニーズ把握を実施。

6月下旬 事業の実施。

※アンケート結果による振り返り

10月上旬 サンタハウス弘前公園施設長との打ち合わせ

10月下旬 事業の実施。

※アンケート結果による振り返り

11月中旬 サンタハウス弘前公園施設長との打ち合わせ

12月上旬 事業の実施。

※アンケート結果による振り返り

4 補助金による支援の効果

補助金の支援を受けたことによって、活動の幅が広がった。具体的には、地域住民が交流しやすい市民会館で事業を開催できたことなどである。私たちの目的は、多世代交流の"場"を作ることであった。そしてその場は「支え手」と「受け手」という関係ではなく、「ともに支え合い、ともに生きる」という面係の変化のきっかけの場でありたいと忌いながら事業を夫施していた。補助全の文援があったことで、「その場を作ることができた」ことが最大の効果であると考える。事業を実施していくなかで、参加者同士が互いに声を掛け合い、参加につながったという声や「今回も楽しかったです。また、お会いしたいです。」と声を掛けられることが度々あった。この何気ない声掛けや会話があることがこの"場"の成果であると強く感じる。

5 反省点・改善点

弘前市民会館以外での開催は年代が偏ってしまっていた。また、どの事業を通しても集客方法 に課題があると感じた。中学校や高校にも広報をする予定であったが、実際にはできていなかっ たため、事業に参加する世代の幅がせまくなってしまった。そのため、次回はもっと広く宣伝し ていきたい。

また、ヒアリング審査時のコメントであった家庭訪問については、今回実施する事業で私たち

が目的としたものより、さらに上のものであったため、実施することができなかった。しかし、 実際には、社会的孤立の状況であり社会参加できていない方も多くいる。今後は、この方々に対 してのアプローチも必要不可欠であると考えているため、検討していきたい。次のステップとし て以上の点を改善することで、多世代交流に繋げていきたいと考える。

6 特記事項

特になし。

7 事業実施時の写真

第1回 あずましの集い



▲ペーパータワーの様子



▲ペーパータワーの様子



▲ペーパータワーの様子



▲風船バレーの様子

第2回 あずましの集い



▲ふくわらいの様子



▲めんこの様子



▲魚釣りの様子



▲めんこと記念撮影

第3回 あずましの集い



▲学生と参加者が一緒になって作っている様子



▲クリスマスツリー作りの様子



▲完成したクリスマスツリー

(3) 弘大囃子組(弘前大学)

1 事業名称

ねぷた囃子で弘前を盛り上げよう!

2 事業実施概要

①実施した事業の概要

イベントでの演奏、ねぷた祭りへの参加・運営手伝い、囃子講習会などの活動を通じて、 弘前市の方々にねぷたの楽しさを伝え、興味を持ってもらい、ねぷた祭りの参加を促す、祭 りを盛り上げるなどを通じて弘前市の活性化に繋げた。

②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか

コロナ禍によって、祭囃子を聴いたことがある人や祭りに参加したことがある人が減少していると考えられた。この点が、地域の伝統継承における課題であると捉え、地域の方々が 津軽地方の祭囃子を聴く機会を増やすという目的を持って実施した。

③どういった活動が地域活性化につながると考え実施したか

笛講習会の実施を通して参加者の方たちに囃子の楽しさを知ってもらい、ねぷた祭りに参加するきっかけをつくることで、祭りの参加者を増やすことが地域活性化につながると考えた。

また、囃子方が不足している団体に囃子方として参加することで、団体継続や当日の運行など祭りの活性化につながると考えた。

④事業を成功させるために何を検討し実施したか (ヒアリング審査のコメントへの対応や検討 事項を絡めて)

囃子の魅力について伝える為には、大衆の前で演奏する機会が多く必要であると考えた。そこで、演奏の依頼をしていただく機会の増加を目的とし、SNS(Instagram・X)を通した弘大囃子組としての活動内容の発信を行った。また、依頼での演奏やSNSを通して囃子に興味を持った人たちに、実際に楽器を演奏する機会をつくることを目的とした「笛講習会」についても実施した。「笛講習会」では、体験を通しての感想や、ねぷた祭りの認知等を問う項目を設けたアンケートを実施した。このアンケートは、参加者の生の声を聞くことで、どのような工夫を行うことでより多くの人に興味を持たせることができるかなどの、弘大囃子組としての活動の指針に用いる目的のもとで、サークルメンバー同士で考えて作成を行った。

⑤事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

笛講習会の実施により、地域の方がねぷたに参加するきっかけをつくることができ、実際に弘大ねぷたに参加してくださった方も増加した。

ねぷた祭りにおいて、各団体の囃子方として参加することで、囃子方の不足を少しでも補 うことができた。

さまざまなイベントで演奏したことで、祭囃子の楽しさを知っていただいたり、囃子組の 活動を知っていただいたりすることができ、地域の祭りを盛り上げることができた。

3 事業実施報告

7月

- ●和徳小学校演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:7月5日(水)、7月12日(水)、7月19日(水)の3日間

各日14:10~14:55

場所:和徳小学校

対象:和徳小学校の4~6年生 約100人

内容:小学生にねぷた囃子を教え、実演を交えながら一緒に演奏する。

②構成員

事業統括者:濱田光生 経費管理担当者:武川怜

参加人数:7月5日(水):9名、7月12日(水):8名、7月19日(水):8名

●大学講義内パフォーマンス

①事業詳細

日時:7月7日(金)16:00~17:30

場所:弘前大学 対象:講義受講者

内容:講義内で津軽地方の伝統的な囃子を演奏し、祭りと囃子について知ってもらう。

②構成員

事業統括者:濱田光生 広報担当者:菅原琉偉

参加人数:8名

- ●千年児童センターサマーフェスタ依頼
 - ①事業詳細

日時:7月8日(土)10:00~11:30

場所:千年児童センター

対象:サマーフェスタに参加する小学生

内容:津軽の祭りの囃子を演奏し、囃子を知ってもらい、親しみを持ってもらう。屋台

の運営の手伝い。

②構成員

事業統括者:柴田香花 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:柴田香花

参加人数:9名

- ●西弘ちょうちん祭り
 - ①事業詳細

日時:7月8日(土)18:00~22:30

場所: 西弘町内

対象:ちょうちん祭り参加者

内容:祭囃子を演奏し、祭りを盛り上げるとともに祭囃子を知ってもらう。 ねぷた運行

への囃子方としての参加。

②構成員

事業統括者: 栗林燦 広報担当者: 菅原琉偉 経費管理担当者:武川怜

参加人数:22名

- ●ねぷた笛講習会
 - ①事業詳細

日時:7月14日(金)、7月18日(火)、7月21日(金)18:00~20:00

場所: 弘前大学岩木ホール

対象: 弘前市民(特に、弘前大学学生・職員)

内容:弘前ねぷた囃子の笛を教えて、実演も交えて一緒に演奏し、ねぷた祭り当日に参

加してもらうきっかけをつくる。

②構成員

事業統括者:濱田光生 広報担当者:柴田香花 経費管理担当:武川怜

参加人数:7月14日(金):10名、7月18日(火):12名、

7月21日(金):13名

- ●サクラスリハケアサービス演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:7月17日(月)15:00~15:30

場所:サクラスリハケアサービス

対象:サクラスリハケアサービス利用者

内容:津軽地方の祭り囃子を演奏し、祭りの雰囲気を楽しんでもらう。

②構成員

事業統括者:栗林燦 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:柴田香花

参加人数:6名

- ●みたけ夏祭り演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:7月22日(土)

場所:三岳公園

対象: 夏祭り参加者

内容:津軽地方の祭囃子を演奏し、祭りを盛り上げるとともに、ねぷた祭りへ興味を持

ってもらう。

②構成員

事業統括者:栗林燦 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:武川怜

参加人数:8名

- ●SHAREA演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:7月26日(水)12:00~12:30

場所: 弘前大学SHEREA

内容:津軽地方の伝統的な囃子を演奏し、大学構内にいる人に祭囃子を知ってもらう。

ねぷた祭りへの参加を促す。

②構成員

事業統括者:濱田光生 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:武川怜

参加人数:5名

- ●みのり町ねぷた町内運行
 - ①事業詳細

日時:7月29日(土)

場所: 稔町会館

内容:町内運行への囃子方としての参加

②構成員

事業統括者:栗林燦 経費管理担当者:武川怜

参加人数:8名

- ●弘大ねぷた運行手伝い
 - ①事業詳細

日時:7月4日~8月1日

場所:弘前大学

対象: 弘大ねぷた参加者

内容:ねぷた制作から弘大ねぷたに参加を希望する方へ囃子を教え、練習会を開催。ね

ぷた祭り当日の囃子方としての参加。

②構成員

事業統括者:濱田光生 広報担当者:菅原琉偉

経費管理担当者:武川怜、柴田香花

参加人数:全43名

8月

●青藍会ねぷた

日時:8月2日(水)、8月4日(金)、8月6日(日)

- ●千年園演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:8月26日(土)18:45~19:15

場所:千年園

対象:千年園利用者

内容:津軽地方の祭り囃子を演奏し、祭りの雰囲気を楽しんでもらう。

②構成員

事業統括者:濱田光生 経費管理担当者:武川怜

参加人数:5名

- ●弘前市原ヶ平町会夏祭り
 - ①事業詳細

日時:8月27日(日)11:15~11:50

場所:千年交流センター 対象:夏祭り参加者 内容:津軽地方の祭囃子を演奏し、祭りを盛り上げるとともに、ねぷた祭りへ興味を持ってもらう。

②構成員

事業統括者:濱田光生 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:武川怜

参加人数:7名

9月

- ●弘前市民中央露店祭り
 - ①事業詳細

日時: 9月2日(土) 17:30~18:00

場所:福村公園 対象:祭り参加者

内容:津軽地方の祭囃子を演奏し、祭りを盛り上げるとともに、ねぷた祭りへ興味を持

ってもらう。

②構成員

事業統括者: 栗林燦 広報担当者: 菅原琉偉 経費管理担当者: 武川怜

参加人数:7名

- ●特別支援学校演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:9月5日(火)、9月13日(水)10:20~11:05

場所: 弘前大学附属特別支援学校 対象: 特別支援学校の小学生

内容:ねぷた囃子の実演とともに、囃子の太鼓と鉦を教える。

②構成員

事業統括者:濱田光生 経費管理担当者:柴田香花

参加人数:9月5日(火)6名、9月13日(水)5名

- ●国吉しめ縄奉納
 - ①事業詳細

日時:9月10日(日)10:00~

場所:国吉農業多目的集会室周辺

内容:登山囃子の演奏。

②構成員

事業統括者:濱田光生 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:武川怜

参加人数:4名

●お山参詣

①事業詳細

日時:9月14日(木)

場所:岩木山

内容:お山参詣行事への囃子方としての参加

②構成員

事業統括者:濱田光生 経費管理担当者:武川怜

参加人数:15名

- ●松原敬老会
 - ①事業詳細

日時:9月15日(金)11:30~12:00

場所:松原集会所 対象:敬老会の方々

内容:津軽地方の祭り囃子を演奏し、祭りの雰囲気を楽しんでもらう。

②構成員

事業統括者:濱田光生 経費管理担当者:武川怜

参加人数:5名

- ●千年園笛講習会
 - ①事業詳細

日時:9月16日(土)14:00~15:30

場所: 弘前観光館

対象: 笛講習会に参加した親子

内容:弘前ねぷた囃子の笛を教えて、実演も交えて緒に演奏し、ねぷた祭り当日に参加

してもらうきっかけをつくる。

②構成員

事業統括者:栗林燦 広報担当者:菅原琉偉 経費管理担当者:武川怜

参加人数:4名

- ●カルチュアロード2023演奏依頼
 - ①事業詳細

日時:9月17日(日)11:45~12:30

場所: 十手町

内容:津軽地方の祭囃子を演奏し、祭りを盛り上げるとともに、ねぷた祭りへ興味を持

ってもらう。

②構成員

事業統括者: 菅原琉偉 広報担当者: 菅原琉偉 経費管理担当者: 武川怜

参加人数:10名

11月

●りんご収穫祭

①事業詳細

日時:11月4日(土)

場所:りんご公園

内容:津軽地方の祭囃子を演奏し、祭りを盛り上げるとともに、ねぷた祭りへ興味を持

ってもらう。

②構成員

事業統括者:工藤花野子 広報担当者:菅原琉偉

経費管理担当者:工藤花野子

12月

●理論天文学・宇宙物理学国内研究会演奏依頼

①事業詳細

日時:12月25日(月)15:00~

場所: 弘前大学みちのくホール

対象:研究会参加者

内容:津軽地方の伝統的な囃子を演奏し、県外から来た方に青森県の囃子を知ってもら

う。また、ねぷた祭りへの興味を促す。

②構成員

事業統括者: 菅原琉偉 広報担当者: 菅原琉偉

経費管理担当者:工藤花野子

4 補助金による支援の効果

- ・今年度は依頼の数が急増したが、交通費の補助によりサークル費で賄う分が少なくできた ため、金銭面で支障なく事業を実施することができる。
- ・塩ビ笛の材料や楽譜印刷を、依頼の数や参加人数等の状況に応じて購入したり増刷したり することができ、参加者に対して数が足りないということがなかった。
- ・事業を行う際に、経費に関して大きな心配をせずに活動することができた。

5 反省点・改善点

- ・笛講習会の広報について、広報の時期をもっと早くし、実施場所をわかりやすく掲載した ら、参加人数がさらに増えたと考えられる。
- ・アンケートを実施したが、質問内容と活動を直接結びつけることができなかったため、質問内容を改善する必要がある。

6 特記事項

特になし。

7 事業実施時の写真

千年児童センターサマーフェスタ依頼

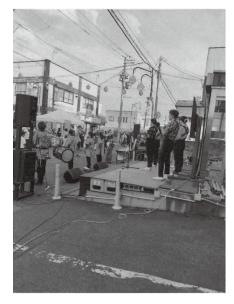
日時:7月8日(土)





西弘ちょうちん祭り 日時:7月8日(土)





ねぷた笛講習会

日時:7月14日(金)、7月18日(火)、7月21日(金)







弘大ねぷた運行 日時:8月1日(火)







千年園演奏依頼 日時:8月26日(土)



お山参詣 日時:9月14日(木)



松原敬老会

日時:9月15日(金)



千年園笛講習会



カルチュアロード2023演奏依頼 日時:9月17日(日)



理論天文学・宇宙物理学国内研究会演奏依頼

日時:12月25日(月)



(4) To save lives(弘前大学)

1 事業名称

釜石市出身の大学生が提案する防災教育

2 事業実施概要

本事業は、弘前市に住む市民(子どもから大人まで)が、洪水や津波をはじめ防災に関する 識を高め、地域の取組を推進していくことに貢献することを目的とした。私たちは、私たちが 岩手県釜石市の高校や地域活動で経験し学んできたことを弘前市市民に提供し役立ててもらう と共に、弘前市の災害に対する地域の取組を知ることが重要と考えた。

弘前市の災害に関する状況は、青森県の内陸部に位置しているため大きな地震が発生した際に津波が来る恐れはないと思われる。しかし、地震が発生した際自分が内陸部にいるとは限らず、旅行や帰省など様々な理由で津波が来る恐れのある場所にいる可能性がある。そのため、大きな地震が発生した際にはどのような行動をとればよいのか、津波の速さはどのくらいなのかという知識を知っておくことが必要になると考える。また、弘前市は2022年の8月の豪雨によって川の氾濫や土砂災害、家屋の浸水などの被害が発生している。そのため、避難場所を知っておくことや防災バッグの準備など日頃からの備えについての意識を高めていく必要があると感じた。

この事業を通して、弘前市民の皆さんが「もし、災害が起きたら自分はどこに避難するのか」「家族で集合する場所はどこなのか」「一番初めに連絡を取る人は誰なのか」「自宅のどこに備蓄がされてあるのか」「そもそも備蓄はされているのか」など1年に1回でも家族で話し合い確認する時間をとるなど防災に対して考えたり行動を起こしたりするきっかけとなれば良いと考える。

今年度行った事業の概要は、

(1) 弘前市栄町での防災訓練(1回)

地域の訓練に実際に参加し、そこで東日本大震災の出来事についてお話をした。

(2) 大成小学校のなかよし会での防災出前授業 (2回)

なかよし会を利用する児童に対して第1回目「みんなに伝えたいこと〜東日本大震 災を経験して〜」第2回目「防災バッグについて知ろう」というテーマでお話をさせ ていただいた。

事業を成功させるために検討したこととしては、①事業の実施において、弘前市の防災について知るために弘前市防災マイスターの皆さんの活動を見学させていただいたこと。②児童に向けて授業をする上では東日本大震災の出来事をどのような言葉で伝え、どのような画像を使用するのか、集中力を保っために工夫できることなど、内容についてなかよし会の先生方と打ち合わせを行い助言してただきながら進めたことや防災バッグについて児童を巻き込んで活動を実施する際には個人で取り組むか、ペアで取り組むか、グループで取り組むのかなど楽しんで学んでもらうためにはどのような形がいいかを話し合い、グループで取り組むという形を最終的には取り入れた。更になかよし会での第1回出前授業では、ゲストティーチャーとして実際に津波から避難した経験をもつ川崎琉衣さん(岩手大学2年生)を招き、地震が発生してからどのような経過で避難をしたのか、また日頃から大切にしてほしいことについてお話をしてもらった。

事業を実施したことによる成果は、少しではあるが関係した市民の皆さんに、防災について考え、知ってもらうきっかけ作りができたことである。具体的には、栄町での防災訓練終了後の参加者アンケート調査では、発表を聴いて印象に残っていることとして日頃の訓練の必要性を感じた」「防災訓練の大切さ」という回答があった。また、大成小学校なかよし会での出前授業後の児童へのアンケートでは「防災のたいせつさや、災害のこわさ、つらさがわかりました。かぞくでひなんじょなどをきめていればよいということがわかりました。」「今日は、ぼうさいバッグのことがわかってよかったです。ぼうさいバッグの中は思っているのとちがっていました。家でも作ってみたいです。」という感想などがあった。また、出前授業の中では、疑問に思っていることを積極的に質問してくれたり、防災バッグの中身についてグループで考える場面では、意見を活発にかわしながら真剣に取り組んでくれたりと、防災について考える様子が観察された。

今回事業を行ったことにより、私たちも学び感じることが多かった。栄町での防災訓練ではただ避難訓練を実施するのではなく、町内会で夏祭りを開催し日頃から集まりやすい環境づくりをするという事を大切にしていると聞き、防災目的だけではないコミュニティ作りの重要性を感じることができた。また、大成小学校なかよし会での出前授業では、授業内容を充実させることの重要性とともに児童とどうやってコミュニケーションを図っていくのかが大切なのだと感じた。

今回の出前授業では授業後に大学生と児童がお話する時間を設けた。その中で防災に関する話の他にも好きなアニメや漫画の話、普段の学校の出来事など様々な内容で交流した。児童はその時間がとても楽しかったと感じてくれており、その時間をとったことで1回目より2回目の方がより打ち解けた雰囲気で授業を行えたと考える。どのようにアイスブレイクを行っていくのかが重要だと実際に学ぶ事ができた。

3 事業実施報告

- (1) 弘前市栄町の防災訓練
- ①具体的な事業報告
 - · 日時: 2023年10月15日(日) 10:30~15:00
 - •場所:栄町町民会館
 - ・内容: 弘前市栄町での洪水時を想定した防災訓練に参加した。防災訓練では、住民の みなさんと共に水や食料など保存食の確認や薬等の物品の確認、担架や発電機 の使用方法の確認を行った。その後、栄町の防災本部の皆さんが行う安否確認 (家庭訪問や車での送迎など)の活動に参加させていただいた。防災訓練終了 後に20分ほどお時間をいただき、東日本大震災について主に釜石市での出来 事等を発表した。炊き出し訓練として芋の子汁とおにぎりをいただき、地域の 方々と懇談した。
 - ·参加人数:19名

(男性11名、女性7名、無回答1名)

(40代2名、50代1名、70代7名、80代8名、無回答1名)

- ・事業当日参加者:小澤向日葵・千葉菜々子
- ②アンケート結果 19名が回答
 - A.「東日本大震災」についてどの程度知っていますか
 - A-1 (発表を聴く前)

「知らない」1名 「名前を知っている」5名 「詳しく知っている」12名 「無回答」1名

A-2 (発表を聴いた後)

「知らない」 0名 「名前を知っている」 3名 「詳しく知っている」 13名 「無回答」 3名

- B. 防災への関心はありますか
 - B-1 (発表を聴く前)

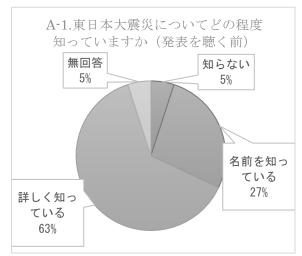
「非常にある」12名 「ある」7名 「ない」0名 「全くない」0名 「分からない」0名 「無回答」0名

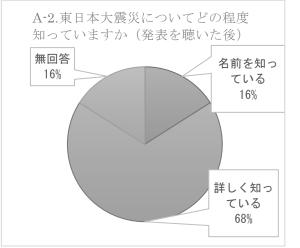
B−2 (発表を聴いた後)

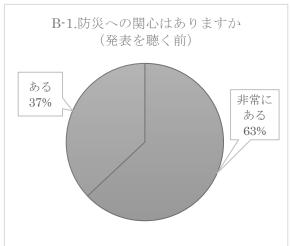
「非常にある」12名 「ある」5名 「ない」0名 「全くない」0名 「分からない」1名 「無回答」1名

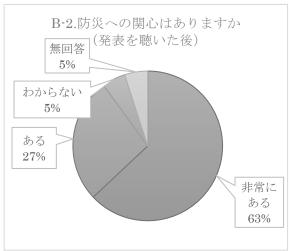
C. 日頃防災という観点で意識していることはありますか

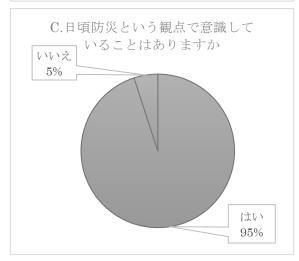
「ある」18名 「ない」1名











(2) 大成小学校なかよし会での防災出前授業

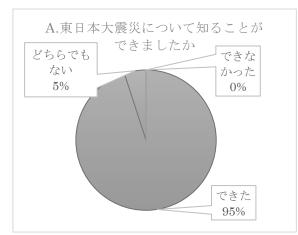
【1回目】

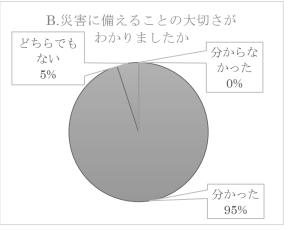
①具体的な事業報告

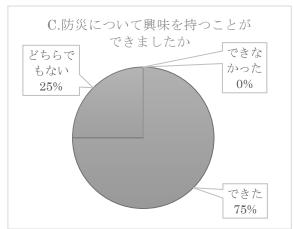
· 日時: 2023年11月4日(土) 10:30~11:30

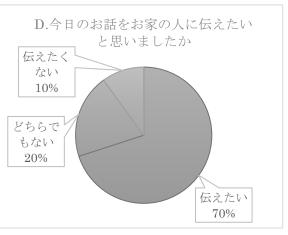
・場所:大成小学校なかよし会

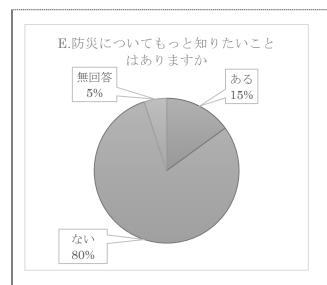
- ・内容:なかよし会を利用する児童を対象に「みんなに伝えたいこと〜東日本大震災を 経験して〜」というテーマでゲストティーチャーを招いて約1時間の授業を実 施した。
- ・参加人数:小学生20名、大人1名 (2年生7名、3年生6名、4年生4名、5年生1名、無回答2名)
- ・事業当日参加者:小澤向日葵・佐々木理志・千葉菜々子・本舘彩未・山崎太陽・萬紗耶 ゲストティーチャー:川崎琉衣(岩手大学2年)
- ②アンケート結果 1回目は児童のみに実施(20名回答)
 - A. 東日本大震災について知ることができましたか 「できた」19名 「どちらでもない」1名 「できなかった」0名
 - B. 災害に備えることの大切さがわかりましたか 「分かった」19名 「どちらでもない」1名 「分からなかった」0名
 - C. 防災について興味を持つことができましたか 「できた」15名 「どちらでもない」5名 「できなかった」0名
 - D. 今日のお話をお家の人に伝えたいと思いましたか 「伝えたい」14名 「どちらでもない」4名 「伝えたくない」2名
 - E. 防災についてもっと知りたいことはありますか 「ある」3名 「ない」16名 「無回答」1名











【2回目】

①具体的な事業報告

· 日時: 2023年11月25日(土)10:30~11:30

・場所:大成小学校なかよし会

・内容:なかよし会を利用する児童を対象に「防災バッグについて知ろう」というテーマで 防災バッグに必要なものを考えたり、実際に防災バッグを触ったり持ったりする活動を実施した。

・参加人数:小学生34名、大人1名

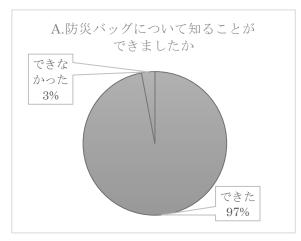
・事業当日参加者:小澤向日葵・千葉菜々子・本舘彩未・菓紗耶

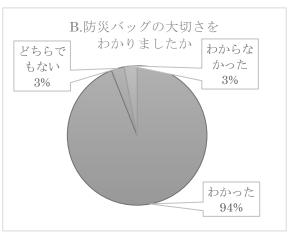
②【アンケート結果】35名回答

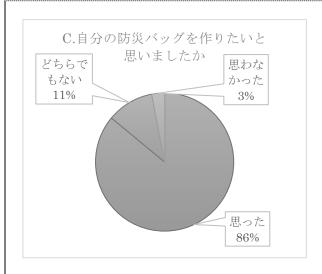
A. 防災バッグについて知ることができましたか 「できた」34名 「どちらでもない」1名 「できなかった」0名

B. 防災バッグの大切さをわかりましたか 「わかった」33名 「どちらでもない」1名 「わからなかった」1名

C. 自分の防災バッグを作りたいと思いましたか 「思った」30名 「どちらでもない」4名 「思わなかった」1名







(3) 構成員の具体的な人数や役割

構成員: 弘前大学の学生4名・弘前学院大学の学生2名

事業統括者:千葉菜々子

事業統括補助者:小澤向日葵

広報担当者:本舘彩末・萬紗耶

経費管理担当者:佐々木理志・山崎太陽

(4) 実施スケジュール

2023年 6月13日 ヒアリング審査

9月17日 弘前市防災マイスターの皆さんと交流 (防災写真展示、防災駅伝クイズの見学)

10月15日 栄町での防災訓練に参加(事業実施)

9月30日 大成小学校なかよし会との第1回打ち合わせ

10月 3日 大成小学校なかよし会との第2回打ち合わせ

10月17日 大成小学校なかよし会との第3回打ち合わせ

10月25日 大成小学校なかよし会との第4回打ち合わせ

11月 4日 大成小学校なかよし会での1回目事業実施

11月22日 大成小学校なかよし会との第5回打ち合わせ

11月25日 大成小学校なかよし会での2回目事業実施

12月19日 事業振り返り

2024年 1月~ 報告書作成・成果発表会準備

1月22日 大成小学校なかよし会での振り返り

4 補助金による支援の効果

補助金の支援によって、ゲストティーチャーを招くことができたことが大きな効果として挙げられる。東日本大震災について出来事を伝える際に、実際に避難した経験を持つ方からの声を届けたいと思っていた。そのため、補助金を活用し岩手県在住のゲストティーチャーを招き東日本大震災当時のことを小学生の児童に向けて伝えることができた。また、防災バッグの中身をより充実したものにするための購入費としてあてることができた。授業の内容を充実したものにできたことは補助金による支援の効果であると考える。

5 反省点・改善点

今回の事業の反省点・改善点としては2つの事を挙げる。1つ目は、発表が一方的になってしまい聞いてくれている方々を引き込むような発表ができなかったことだ。栄町での防災訓練での発表後に実施したアンケートでは「どのような話をどれくらいの時間するのか最初に言った方が良い」という意見をいただいた。その意見をいただいた後に実施した大成小学校なかよし会での授業では見通しを持って授業を進めることができた。しかし、なかよし会での第1回目の出前授業では児童に呼びかけたり児童が参加したりする活動が少なかったこともあり集中力を持続することが難しかったと感じた。そのため、どうしたら興味をもって発表をきいてもらえるのか、事前に知りたいことのアンケートをとり内容を考えていくことが重要だと考えられる。また、児童の発達段階について知りその段階に応じて取り組む内容を精査していくことが必要であると感じた。さらに、なかよし会の皆さんとの振り返りでは、最初「防災バッグを作ってみよう」という題名で内容を提案したが当日はワークシートでの活動となり、題名と内容で差が発生してしまったこと、ワークシートの漢字にフリガナを振っていなかったことが反省として挙げられた。

2つ目は、「防災かるた」や「避難所運営ゲーム(hug)」など事業計画書に記載した内容を実施できなかったことだ。今回はまず東日本大震災について知ってもらうことをテーマに発表しそこから防災について考えてもらうきっかけとして「防災かるた」や「避難所運営ゲーム(hug)」を活用したいと考えていたが計画的に準備を行う事ができなかった。また内容の難易度の高さから事業の中に組み込むことができなかった。「防災かるた」に関しては、出前授業の実施日とは別に日程を設けるなど工夫することで取り組めるようにしたいと考える。

6 特記事項

特になし。

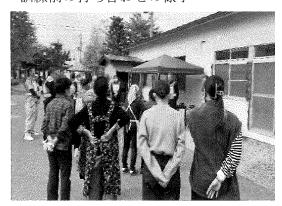
7 事業実施時の写真

(1) 弘前市栄町の防災訓練

発電機の作動確認の様子



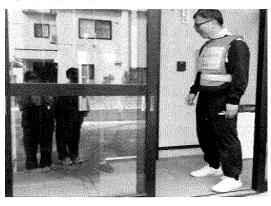
訓練前の打ち合わせの様子



交流している様子



安否確認の様子



物品の確認をしている様子



発表している様子

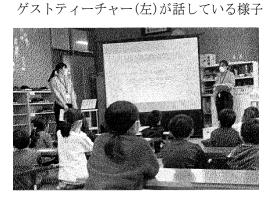


(2) 大成小学校なかよし会での防災出前授業

○×クイズの様子

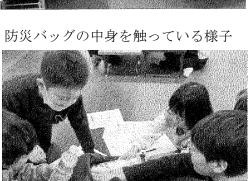


防災バッグの中身について考える様子1



防災バッグの中身について考える様子2





感想を書いている様子



(5) Waku waku club (弘前医療福祉大学)

1 事業名称

小比内健康いきいきプロジェクト~つなげよう!健康リレー~

2 事業実施概要

①実施した事業の概要

小比内地区住民が、楽しみ、生きがいを見つけながら、健康への関心や健康づくりへの意欲を向上することを目的として、今年度は、小比内地区の老人クラプ会員(25人)、豊田児童センターの児童(23人)を対象に、健康づくり活動(健康教室)と、地区住民を対象とした健康に関する情報提供(保健だより)を行った。

(1) 健康づくり活動 (健康教室)

老人クラブ活動と児童センター活動へ参集している高齢者、児童を対象に3回実施(①8月20日、②9月20日、③12月9日)した。1.2回目は地区の農業会館を使用し、高齢者を対象とした健康教室を実施した。参加人数は1回目6人、2回目9人で2回連続で参加してくれる方が多く見受けられた。内容は1回目を「縁日」とし、輪投げ、ボーリングなどのゲーム的な内容と健康への意識向上の機会とした内容を合わせて、4種類のブースを設けて実施した。ゲーム的な内容では、声を出し楽しみながらも健康の要素を取り入れ、より効果的に実施できるような声がけをしながら実施した。また、健康的な内容では「InBody」を用いて筋肉量等を伝え、転倒予防を意識する機会を作った。口腔に関する健康教育(歯周病予防等)そして、健康体操(わもなも体操)を実施した。

2回目は、フレイル予防についての健康教室を実施し、(講義形式で)講話後、フレイル 予防体操を実施した。深呼吸、かかとつま先上げ、ももあげ、手のグーパー運動、足の伸 ばしストレッチ等の運動を行うとともに、体操による効果も同時に説明を行った。

3回目は、当初の計画としては2回の予定だったが、児童が参加できなかったことから 大学周辺地区の児童センターに声をかけて、館長と打ち合わせをし3回目を計画して、小 学生を対象とした健康教室開催に至った。場所は児童センターを活用し、児童23人を対 象に、口腔に関する健康教育(むし歯予防・対策)を実施した。クイズ形式とし、児童た ちが楽しみながら、また、一緒に参加しながら口腔・歯に関する健康を考え、学ぶ機会と した。

今年度は昨年度までの改善点として挙げられていた、対象の拡大・事業の拡大を目指して活動したため、対象の拡大に伴い、高齢者だけではなく、児童も内容を理解しやすく、興味を引くような内容とし、言葉もわかりやすく表現することを意識した。計画の段階では、高齢者と子供が交できるように工夫していたが、高齢者と子供が一緒の健康教室ができず多世代交流の達成は出来なかった。

(2) 健康に関する情報提供(保健だより)の作成

健康づくりに関する情報提供の機会として、小比内地区の全世帯を対象に回覧板で8月. 9月・12月の計3回テーマを設定し発行した。保健だよりのテーマは、8月号「熱中症 予防」9月号「運動」12月号「今年の活動のまとめ」とした。また、健康教室の周知はチラシを作成し、保健だよりと一緒に毎戸回覧として小比内地区会長に依頼した。

②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか

新型コロナウイルス感染症への対策が緩和されてきたが、その影響により、地区内の高齢者間のつながりが希薄になっていることが続いていた。コロナの感染の不安があったり、外出の機会が減っていると考えられるが、人と会うこと、話すことは、高齢者には必要不可欠である。健康教室の参加者にもその影響があり、参加者数も横ばいである。しかし、現在来ている参加者は、健康に関心があり、体操にも積極的に取り組む様子がみられたり、町会長さんや老人クラブの会長・副会長さんが活動的であることなど、健康意識はあり、住民同士のつながりも強い地域であると考えられる。そのため、住民同士で集まる機会を提供し、住民のつながりの強さを生かすことで、学生がこれまで伝えたことを住民同士で振り返る機会

をつくり、住民自身が健康のために行っていることを伝えるなど住民が先頭にたち、住民自身が発信者となり、より健康でいられるために、まずは、人づくり、場づくりというものが、小比内地区には必要であると考える。また、小比内地区にとどまらず、対象地区を拡大していくことにより、他の地区でも活性化や賑わいを増やすことにつながり、これが地域活性化になると考えた。

そのため今年度も地区住民同士が交流でき、かつ健康の保持増進ができる機会を作ることができたらと思い、健康教室を実施した。また、健康の環が世代にかかわらず、地域へ広がることが地域活性化へつながると考えていたため、対象拡大として、児童を対象に健康教室を実施し、児童のニーズや生活を把握することとした。

③どういった活動が地域活性化につながると考え実施したか

小比内地区住民が、楽しみ、生きがいを見つけながら、健康への関心や健康づくりへの意 欲を向上する事である。また、楽しみながら健康づくりができることで、参加した高齢者や 児童が健康づくりの発信者となって、家族や友達に健康教室で学んだことを伝えあい、広げ ていくことが地域活性化につながると考え活動した。

- ④事業を成功させるために何を検討し実施したか
- ・児童が参加することによる効果については、健康教室で得た知識を児童自身の生活に取り 入れたり、得た知識を家族へ伝えるなどの波及効果を期待し、分かりやすい内容であることや家族にも伝えて欲しいことを意識して健康教室を実施した。
- ・小比内地区に留まらず、弘前市全域に広めるような取り組みの計画については、今年度は 豊田児童センターで健康教室を実施することができ対象の拡大へ繋げることができた。さ らに、活動の周知や興味関心を持ってもらえるような場づくりの機会として、町会の総会 に参加させていただくことになった。これは今後の対象地区の拡大に繋がっていくと考え る。
- ・児童が参加する上での安全対策については、児童が来ると想定して、ケガや熱中症予防・ 事故予防の安全に関する留意点について、ポスターを会場に掲示した。また、3回目では 景品として健康食品(キシリトールグミ)があるため、アレルギーの確認と正しい食べ方 (摂取量等)を行った。また、初めて児童センターで健康教室を実施するため、安全面や 健康教室の構成を考える上で、児童の参加人数の把握や館長や教員との連絡を密に行った り、本番を想定し、各回ごとに入念にリハーサルを行い、学生間で意見を積極的に出し合 い、教員からの助言を受け、計画の修正を繰り返した。
- ・ポケットティッシュの使い道については、活用方法を検討し続け、健康教室の際や町会の 総会で配布するなど、Waku waku clubの活動の周知のために使用し今後の 対象地区拡大の一助となった。
- ⑤事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

今年度は、機会に恵まれ、児童を対象とした健康教室ができたことから、Wakuwakuclubの活動の広がりや周知につながり、児童を対象とした時の健康教室の実施内容の工夫や児童のニーズを把握することにつながったと考える。

高齢者の参加者数は、1・2回目合わせて15人と昨年と同様の感じであったが、継続し

て参加される方が多く、学生活動が定着してきていることも成果として感じた。事業を継続的に実施していることにより、去年参加した人にとっては復習の機会となっていた。友人に誘われて初めて参加してくれる人にとっても、健康に関する新しい情報を得ることにつながったと考えられる。住民より、「ここに来るのが楽しみ」といった声が多く聞かれていることから、楽しみや生きがいを感じてもらう機会になっていると考える。

児童対象の健康教室は23名が参加し、クイズ形式で楽しみながら歯の健康について学んでもらった。実際に実施してみると、児童からは、「奥の歯をちゃんと磨けてなかったから、これからは磨くようにする」という声がきかれ、児童の知識を吸収する速さを実感した。また、月1回の歯ブラシ交換を伝えた上で歯ブラシを渡したことで、児童がすぐ行動に移しやすい意識づけや、児童という早期の段階から、健康に関する知識の普及ができたと考える。

児童から家族への波及効果も考えられ、次年度も引き続き児童を対象に入れることは、効果的な健康教育実施につながると考える。また、児童と学生で小グループを作り、話す機会を設けられたので、児童の生活の仕方についても交流を通して知ることができた。

3 事業実施報告

①具体的な事業報告・方法

(1) 健康づくり活動 (健康教室)

①健康教室(8月20日)場所:小比内農業研修会館

時間:10時~11時30分

対象:小比内地区の老人クラブと小学生、興味・関心のある方

参加人数:6名(男性:4名、女性:2名)(年代:73歳~85歳) ⇒小学生の参加者は無しだった。

<会場の設営>:縁日らしい雰囲気になるように、会場の装飾を行った

<テーマ>:縁日

<全体の流れと内容>:輪投げ、ボーリング、魚釣り、InBodyの4つのブースを用意し、各ブースに学生2名程を配置し、参加者に全てのブースに参加していただいた。内容は、健康の要素を取り入れ、輪投げでは利き手首にリストウェイト(おもり)を装着してもらい実施した。ボーリングでは、右手・左手両方でボールを投げる体験をしてもらった。魚つりでは、魚の口に輪をつくり小さい魚と大きい魚の2種類を用意し、椅子の両端に設置した大小のボックスに小さい魚と大きい魚を分けていれるというルールにした。ボックスに魚を入れる際は、無理のない範囲で腰をひねる動作を意識してもらった。ゲームの後は、全員で着席し、謎解き宝探しゲームと題し、口腔に関する健康教育をパワーポイントを用いて実施した。

最後は、参加者と学生全員で、健康体操(わもなも体操)を実施し、アンケートに協力いただいた。Waku waku clubの活動の周知のため、ポケットティッシュをお渡しした。

【アンケート結果】

- 1. 健康教室に参加した理由(複数回答)
 - ⇒チラシをみた(2人)、友人・近所の人からの誘い(1人)、健康に興味があるから(4人)、縁日が楽しそうだったから(2人)、毎年参加しているから(5人)、その他(ふれあいが良いから)
- 2. 健康教室に参加してみて、よかったと思うこと(複数回答)
 - ⇒自分の体について知ることができた(4人)、地域の人と交流できた(4人)、ゲームや体操で体を動かすことができた(4人)、ゲームやクイズ、体操が楽しかった(4人)、学生に会えてうれしかった(6人)、景品をもらえてうれしかった(2人)
- 3. 1番楽しかったもの
 - ⇒魚釣り(1人)、体操(2人)、全部(3人)
- 4. また来年も参加したいと思ったか
 - ⇒ぜひ参加したい(6人)
- 5. 来年度の健康教室で知りたい内容
 - ⇒食事のバランスについて
- ②健康教室(9月21日)小比内農業研修会館で実施

時間:10:00~11:00

対象:小比内地区の老人クラブ

参加人数:9名(男性:4名、女性:5名)(世代別:70歳~89歳)

<テーマ>:フレイル予防について

<全体の流れと内容の詳細>:講義形式で、パイプ椅子に着席してもらい、健康教室を実施した。フレイルのチェックリストを用いて、参加者自身の身体の状態を振り返ってもらい、その後、フレイルについての説明、予防方法等と、次に、フレイル予防体操(かかとつま先上げ、ももあげ、手のグーパー運動、足の伸ばしストレッチ等)を実施した。終了後に、まとめとして、今回の内容を振り返り、口頭で感想や意見を聞いた。

【感想・意見】

「楽しかった」「フレイル体操が気に入った。」

③健康教室(12月9日)豊田児童センターで実施

時間:10:30~11:00

対象:豊田児童センターの小学生、興味・関心のある方

参加人数:23名(学年別:1年生15名、2年生5名、4年生3名)

<テーマ>:歯の健康について学ぼう!ピカピカ給おくちクイズ

<全体の流れと内容の詳細>: クイズ形式で実施した。「お口の中を探検!謎解きクイズ」と題して、児童が口の中を探検するという設定で、ばい菌が出すクイズに答え、正解すると景品をもらえるといった構成にした。クイズは選択問題で計7問出題し、児童に手を挙げてもらったり、手で「マル」や「バツ」をつくり、回答してもらった。その後、学生がリーダーとなって小グループを5つ作り、健康教室の感想と、児童の生活状況(間食、朝食、運動、歯みがき習慣など)を聞いた。最後に景品を渡し、終了した。また、当

日参加できなかった児童も学べるように、歯の磨き方や歯プラシの交換の目安などを記載したポスターを作成した。健康教室終了後館長にお渡しし、施設内に掲示していただいた。

Waku waku clubの活動の周知のため、ポケットティッシュ140個をお渡しした。

- ②構成員の具体的な人数や役割
 - ◎4年生(9名)
 - ○リーダー3名(事業統括者1名、事業統括補助者1名、経費管理担当者1名)
 - 【役割】申請書、報告書の作成、ヒアリング審査への参加、教員やコンソ事務局とのやりとり、老人クラブ等との日程調整、打ち合わせ、年間スケジュールの作成、3年生・4年生への連絡・調整、成果発表会参加等
 - ○健康教室係4名
 - 【役割】健康教室の企画から運営すべて(指導案作成、ppt作成、チラシ・ポスター作成、アンケート作成、当日の運営、実施後のアンケート集計、成果発表に向けたポスター作成等)
 - ○保健だより係2名

【役割】年2回の保健だより作成、成果発表に向けたスライド作成

- ◎3年生(16名)
 - ○リーダー4名
 - 【役割】4年生との連絡調整、3年生への連絡、3年生全体の統括、教員とのやりとり
 - ○健康教室係10名
 - 【役割】指導案作成、ppt作成、チラシ・ポスター作成、アンケート作成、当日の運営、4年生健康教育のサポート
 - ○保健だより係2名

【役割】保健だよりの作成、健康教室への参加

- ③実施スケジュール
 - 7月中旬 町会長さんとの打ち合わせ (4年生リーダー)、3·4年生への連絡 (4年生リーダー)、保健だより①作成開始 (4年生健康教室係)
 - 7月下旬 町会長さん・老人クラプ副会長さんとの打ち合わせ(4年生リーダー)、保健だより配布
 - 8月上旬 健康教室1回目準備・練習、リハーサル
 - 8月20日 健康教室1回目実施(4年生9名、3年生4名)
 - 8月下旬 保健だより②作成、学生振り返りアンケートの実施
 - 9月上旬 保健だより配布
 - 9月中旬 健康教室2回目準備・練習、リハーサル
 - 9月21日 健康教室2回目実施(3年生8名、4年生1名)
 - 9月下旬 学生振り返りアンケートの実施
 - 11月中旬 保健だより③作成、参加者アンケートの集計

- 12月上旬 保健だより配布、健康教室準備
- 12月9日 健康教室3回目実施(4年生)
- 12月中旬 成果発表会に向けた準備、事業報告書の作成等

4 補助金による支援の効果

補助金の支援を受けたことによって、今年度も継続して、学生が地区住民と接し交流する 機会を作ることができた。

補助金で購入したボーリングセットや輪投げセットなどにより本格的なゲームを実施でき、住民が楽しんで健康づくりを実施し、身体的・精神的にも健康の向上に繋げられたと考える。また、目的としていた世代間交流の場面にも今後活用していくことができると考える。

児童を対象とした健康教室でキシリトールグミや歯ブラシの活用により「このグミどこに売っているの」「(保護者に)買ってもらおう」「これ(景品の歯ブラシ)に交換する」といった声が聞かれ、興味・関心を引くことができただけでなく、行動に移すきっかけづくりとなった。このように、今年度は児童を対象に実施したことにより、児童のニーズや生活について把握し、効果的な伝え方が分かり、士台づくりは出来たと考えられるため、次年度はさらに工夫をして活動したい。

また、ポケットティッシュに宣伝用の用紙を挟んで、配布したことにより、学生の地域活動の周知の規模を拡大することができたと考える。作成したパンフレット(家でできる体操の方法)によっても、住民の行動の動機づけ支援につなげることができたと考える。

さらに、健康教室実施後のアンケートより、参加者全員から「また参加したい」、「ゲームやクイズ、体操が楽しかった。」などの回答が得られた。そのため、この事業を通して小比内地区の住民の皆さんに健康づくりの知識や体操を通して楽しく健康への関心や健康づくりの意欲を向上することができたと考える。

5 反省点・改善点

アンケートから来年度の健康教室で知りたい内容として、「食事のバランスについて知りたい」という声があった。3年間の活動では、運動に着目して実施してきたため、テーマにバリエーションを持たせて、ワンパターンとならないように実施していく必要があると考える。また、周知方法について、今年度は回覧板を用いて住民全体に向けて健康教室の告知を行ったが、1回目の健康教室は高齢者のみの参加となった。そのため、児童を対象とする場合、児童センターといった児童がいる施設に直接働きかけるなど、対象者に合った周知方法を工夫して行う必要があったと考える。時期に関しても土曜日や日曜日、夏休みの前半の時期にするなど、児童や保護者に集まっていただきやすい日時を検討する、実施方法も参加人数を増やすだけでなく、参加人数に応じて、少人数とし複数回開催するなどの工夫で参加者と話しやすい場を設定するほか、対象者のニーズを今後も把握する必要があると考える。

今年度は、学生の活動の仕方として、学生の役割に偏りが出たことにより、健康教室の準備に取り掛かる時期が遅くなってしまった。それにより、健康教室の周知の時期が短くなっ

たことや、健康教室の開催時期が例年より遅くなったという影響があった。来年度は速めの 行動を心掛けることや、一部の学生に役割が集中しないよう、学生全体で声を掛け合いなが ら取り組んでいく必要があり、そのためにも、学生間(同学年、他学年)の伝達を密にする 必要があると考える。

6 特記事項

- ・健康教室は、新型コロナウイルス感染症・インフルエンザ対策を踏まえ、検温、換気、消毒を実施し、感染予防対策を徹底し行った。
- ・継続した健康づくりのために保健だよりに自宅で実施できる体操を紹介したり、児童センターに歯の健康に関するポスターを掲示した。当日参加した児童は健康教室を振り返り、正しい歯磨きの仕方を自宅でも継続して実施できるように、当日参加出来なかった児童もポスターを見て、歯の磨き方を学び、参加した児童からの波及効果も期待し、健康教室での学びを継続して生活の中に取り入れられるような工夫をした。
- ・活動を継続する上で、4年生から3年生への引継ぎを強化する必要があると考えたため、 引継書と2年間の振り返りと今後の計画案を準備し、活動の引継の機会を設けた。
- ・保健師課程を選択する前の2年生に対してWaku waku clubの活動や魅力、 楽しさを紹介し、クラブの周知と低学年でも学生ができる地域支援活動について興味・関心 を持ってもらう機会を設け、来年度に繋げた。

7 事業実施時の写真

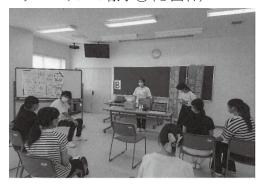
リハーサルの様子①(1回目)



健康教室の様子①(8月)



リハーサルの様子②(1回目)



健康教室の様子②(InBody)



健康教室の様子③(魚釣り)



集合写真①



準備の様子(2回目)



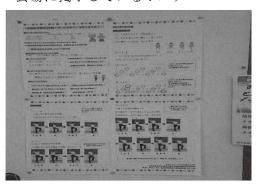
健康教室の様子①(2回目)



健康教室の様子②(2回目)



会場に掲示しているポスター



準備の様子(3回目)



準備の様子(3回目)



準備の様子(3回目)



健康教室の様子①(3回目)



健康教室の様子②(3回目)



集合写真②



低学年への活動の周知



町会長さんとの打ち合わせの様子



(6) 弘前医療福祉大学救急救命研究会(弘前医療福祉大学短期大学部)

1 事業名称

弘前市内の小学生親子を対象とした防災救急教室

2 事業実施概要

日本は災害大国であり、いつどこで災害が起きるかわからない。比較的災害が少ないと言 われている弘前市においても令和4年には観測史上最大の集中豪雨を記録し、河川の氾濫や 土砂災害、農園での被害も発生した。このような状況において日頃から防災意識を高めてい くことが重要である。しかし、学校や職場で実施されている防災訓練は年に数回程度であり、 その中でも地震・火災などが発生した際の避難訓練が中心に行われている。このことから実 際に災害が発生した際の対応や防災の知識を深く身につける機会が少ないことが課題である

と考える。

この課題を解決するために昨年度までは子供のみ対象の事業であったが、新型コロナウイルス感染症の規制緩和に伴い、同じ時間に同じ空間で内容を共有し、知識の定着を図るため、親子参加型とした。昨年度は一つの事業だけでは十分な参加者の募集が図れなかったため、本事業は第1事業・第2事業に分けて実施した。第1事業では、小学生の柔道大会のイベントコーナーにて心肺蘇生法や防災クイズラリーを出展した。同時に第2事業に向けて参加者にチラシを配付し広報活動も行った。第2事業では、親子を対象として本学で心肺蘇生法・防災クイズ・暗闇脱出体験・ボルダリング・災害時の炊き出しなど1日を通して防災について学ぶことができる体験型のイベントを開催した。

事業を成功させるために、昨年度からの課題である参加者の集客に力を入れ活動した。第 1事業では、親子が参加する大会であったため、第2事業で対象となる方々にポスターを配付した。第1事業終了後には小学生の夏季休業前に小学校や児童館にポスターを配付し、保護者への周知を図る他、スポーツ少年団・スイミングスクール・児童館・公園などで体を動かしている親子などに対しても集客活動を行った。

本事業を実施し、第1事業では自分たちからブースなどに出向き、多くの人に参加いただくことができた。第2事業では、第1事業で宣伝し集客を図る計画であったが、応募人数をなかなか増やすことができなかった。第2事業実施前後にはアンケートを実施し、「防災について家族間で話し合いたい」「また是非参加したい」「子供と学ぶことにより、今後も若い世代が防災について考える弘前になればよいと思った」「小学校では心肺蘇生法など学ぶ機会がなかったのでとても勉強になった」「知っているつもりの災害・救急について改めて知ることもたくさんありとても楽しい時間だった」などの意見をいただいた。また、事前アンケートで防災に関して「興味がない」と回答した参加者も防災救急教室によって「とても興味がある」という回答に変化が見られた。災害時に自分自身がすべき行動などを理解し、親子で確認することができた。次回も参加したいという声をいただき、満足のいく結果となった。しかし、前年度からの課題である集客について改善することができなかった。そこで、青森県内における防災に関する意識調査を実施した。

3 事業実施報告

①事業報告

【第1事業】第12回スポーツひのまるキッズ東北小学生柔道大会(ブース出展)

日時:令和5年6月18日(日)

場所:青森県武道館

内容:防災クイズラリー、心肺蘇生法、人体パズル※スタンプラリー形式で景品

参加人数:小学生 男子159名 女子83名 計242名

【第2事業】

日時:令和5年9月24日(日)

場所:弘前医療福祉大学短期大学部USAR訓練棟

内容:心肺蘇生法、防災クイズ、暗闇脱出体験、ボルダリング、災害時の炊き出し

参加人数:親子5組 計10名(男子小学生4名、女子小学生1名)

②構成員の人数及び役割

救急救命研究会に所属する本学科の学生28名及び本学科の教員4名

• 事業統括者: 吉光 梨乃

• 事業統括補助者: 齊藤 美優胡

• 広報担当者: 佐藤 明保

· 経費管理担当者 · 安田 芽生

③実施スケジュール

- 6月上旬 ヒアリング審査 (13日)・第1事業準備
- 6月17.18日 第1事業実施
- 7月上旬~9月 第2事業準備
- 9月24日 第2事業実施
- 10月下旬~令和6年2月 成果発表準備

4 補助金による支援の効果

今回の補助金により第1事業では自分たちでデザインした広報活動のためのポスターの発注を行った。昨年度の課題である集客不足を解決するために今年度は、ポスターを小学校やスポーツクラブなど小学生が集まる施設や団体に直接出向き、第2事業に向けての宣伝効果を行った。第1事業のイベント当日には参加者に参加賞としてメダルやお菓子を配布、参加者も自分たちも満足できる結果となった。第2事業では防災炊飯袋を購入し、事前に炊き出し練習を複数回デモンストレーションすることができた。また、ワークシートの作成や防災グッズの配布などをし、事業当日から災害に対する備えを行うことができ、防災に対する意識付けもできた。

5 反省点・改善点

第一事業で第二事業の広告を行ったが、参加者が集まらず前年度と同じ課題の解決には至らなかった。今回は災害を経験したことが少ない年代である小学生を対象とし、親子で参加してもらうことでより深い知識の定着を図ることを目的とした。そのため児童館やスポーツクラブにもチラシを配り、宣伝活動を行ったが5組の応募となった。そこで私たちは、市民の防災に対する関心・興味を調べるため、イベントに参加した155名からアンケートを回収した。結果として、半数以上の人が防災イベントに参加したいという回答が得られた。このことから防災救急活動は引き続き実施していくべきである。しかし、予定が合わないなどの理由で防災の優先順位が低く参加ができていない。そのため、事業を複数回開催したり開催時間を短くしたりすることで改善できるのではないかと考えた。また、実際に災害を経験していない人もマスメディアを通して、危機感を持つことで防災救急教室に参加する人数も増えていくのではないかと考えた。

過去にも集客できないことが反省点として挙がっていたが、その根拠まで見出すことができていなかった。今回の意識調査では青森県内における防災イベントのニーズを把握することができたため、次年度以降の活動では事業を複数回開催すること、参加者が自由に出入りできることなど気軽に参加できる環境を作り、より良い事業に改善していきたい。

6 特記事項

私たちがこの活動を通して一番に重視したことは、「親子で楽しく知識を深めてもらう」ということである。これまで本団体で実施してきた学生地域活動支援事業では、親子で参加する事業を実施したことはなく、対象を親子にすることで家族の間で知識を深めることができた。また、親子で参加することで安心感や活動しやすい環境づくりを心掛けた。当日は、職場や学校の訓練、家庭では体験できない内容を体験してもらうことができた。実際に体験してもらい、親子で話し合いをして知識を深めている場面が見られたことで今回の事業の目的でもある親子で災害についての深い知識を定着させるということを達成できたと考える。参加者一人一人に防災グッズを配付し、家庭に持ち帰って災害の意識をさらに高めることもできた。活動終了後には、当日の様子を撮影した画像をクラウド上にアップし、参加者の方が自由に写真をダウンロードできる体制をとった。また、将来救急救命士を志す小学生も参加しており、後日学生宛てに感謝の手紙をいただいている。地域課題の解決だけで

はなく、1人の小学生の夢にも繋がる有意義なイベントになった。企画を計画し、実施することの大変さや、市民の意見を取り入れたり、需要を考えることの難しさを感じることができたこの事業は、我々学生にとって貴重な社会経験の場となった。アンケート調査では災害に関する青森県内の現状を把握することができたため、救急救命研究会として今後の活動に活かしていきたい。

7 事業実施時の写真



ボルダリング体験



暗闇脱出ゲーム



炊き出し提供



心肺蘇生法教育



防災クイズ

3. 成果発表会

事業の終了報告として、各学生団体が実施した事業の成果等を広く知ってもらうため、成果発表会を開催した。また、当日の発表会運営を本コンソーシアムの学生委員会「いしてまい」が行った。

(1) 概要

日 時:令和6年2月25日(日)

13時00分~16時00分

場 所: 土手町コミュニティパーク 多目的ホール

对 象:市民、学生、大学·行政関係者等

(入場無料、申込不要)

来場者:約50名

視聴者:約150名(アップルストリームLIVE配信)

主 催:大学コンソーシアム学都ひろさき

共 催:弘前市

(2) 発表会の様子

【成果発表の様子】









表彰 (審査)

今年度採択された学生団体の事業内容や成果発表会での発表の様子等を審査する。

○審査員による審査

審査員(3名)による審査で、事業内容や発表能力等について、5つの審査項目に関し、 0点~3点の15点満点で採点する。

=審查項目=

- ①学生だからこそ実施できた独自のアイデアで溢れる事業か。
- ②地域課題の解決や地域の活性化に繋がる活動であったか。 (地域や市民への貢献性の高い事業であったか。)
- ③費用と効果、成果のバランスが取れているか。(費用対効果の高い事業であったか。)
- ④地域貢献に対する検証がされているか。
- ⑤与えられた時間を有効に使い、事業概要や事業成果をわかりやすく発表ができているか。
- ○来場者による審査

来場者全員による審査で、最もよい事業を実施したと思う学生団体を1つ選び、審査員による審査に1票1点を加点する。

○「最優秀賞」の決定について 審査の合計点数が最も高い学生団体に「最優秀賞」を表彰する。

最優秀賞

救急救命研究会(弘前医療福祉大学)



(審査員による)講評

- ○学生の皆さんが学業やサークル活動などでこれまで学んできた事、経験した事を地域の皆 さんとの交流の中で活かしてきたことはいずれも地域との繋がりを持った活動であった。
- ○イベントを開催した時だけではなく、普段からの地域とのコミュニティづくり、繋がりづくりが大切だと気づいた学生の皆さんが素晴らしい。
- ○コロナ禍が終わり、活動が自由にできるようになったが、皆さんの活動を地域の方々に知ってもらい、ご協力をいただきながら、皆さんの活動がますます素晴らしいものになることを願う。

4. 事業成果

今年度は6団体の申請があり、前年度からの継続団体4団体と新規団体2団体の全てが採択された。それぞれイベント実施や調査活動等、各団体の特徴を活かした学生ならではのオリジナリティ溢れる活動を弘前市内各所で行った。これにより、学生と地域の人との交流が新たに生まれ、

活動を通して、自分達が生活する弘前市の新たな魅力や団体の今後の目標や課題の発見に繋がったと考える。

5. 次年度以降の実施に向けた改善点

- ・来場者数は去年同様だったものの、参加団体が少ない、もっと見たいとの意見が散見された。 事業の周知について改めて検討したい。
- ・質疑応答が少なめで、意見交換があまり行われなかった。発表に中休みを入れて考える時間を 作る(アンケートでご意見あり)、ポスター周辺に椅子等を配置し休憩時間に交流が生まれや すくするなど工夫が必要。

【参考】同事業の要項

(1) 応募できる団体

学生で構成される団体(ゼミ、研究室、課外活動団体等)で、次の要件の全てに該当するもの。なお、既存の団体のほか、新たに組織する団体も対象とする。

- ・学生の活動を教員が実質的に指導していること。(名義のみの顧問は不可とする。)
- ・構成員が概ね5人以上であること。
- ・コンソーシアム構成大学の学生で組織された団体であること。
- ・事業完了後に開催される、成果発表会に必ず出席できること。

(2) 対象事業

弘前市の地域活性化や地域課題の解決を目的に実施する事業で、次に掲げる要件の全てを満たしているもの。

- ・弘前市内で実施される事業であること。
- ・弘前市民を対象にした事業であること。
- ・令和6年1月31日までに全経費の支払いと完了報告書の提出が完了する事業であること。

(3) 補助金額と補助対象経費

- ① 補助金額
- ・単一の団体が事業を行う場合:上限100,000円
- ・異なる大学の団体が連携して事業を行う場合:上限200,000円
- ② 補助対象経費

事業を実施するために直接必要な経費とする。

(講師等謝礼、旅費、消耗品費、原材料費、燃料費、印刷製本費、通信運搬費、保険料、会場等使用料、賃借料及びその他本コンソーシアム会長が適当と認めたもの)

(4) 事業審査及び審査基準

応募書類及び申請団体へ	のトアリ	ング等を実施し、	次の10項目に	ついて審査し、	決定する
	V/L/	/ / // // // // // // // // // // // // // //			. 1/1 / [9 /2].

○適確性	○効果性	○適切性	○自主性	○実現性
○公益性	○₩賦性	○費用妥当性	○将来性	○狆創性

令和5年度活動報告

Ⅱ. 連携推進事業

5大学合同シンポジウム

1. 趣旨

来場者が興味を持ちやすいテーマを設定し、市民向けの公開シンポジウムを開催することにより、コンソーシアム及び構成大学の取組をより多くの人に知っていただけるようPR活動をする。

2. 概要

○テーマ

「大学コンソーシアム学都ひろさき5大学合同シンポジウム ~ファブをしよう~」

○内容

「ファブをしよう」というテーマのもと、専門であるヒューマン・コンピュータ・インタラクション、特に特殊な素材と構造を活用したコンピュテーショナル・ファブリケーション、形状変化インタフェース、ソフトロボットなどの研究について講演。また、市政・大学・地域住民でファブラボを活用する意味を考える。

○日時

令和5年12月9日(土) 13時30分~15時00分

○聴講方法

- ・公開視聴会場(土手町コミュニティパーク)
- ・オンライン配信(アップルストリーム) http://applestream.jp/

○基調講演講師

鳴海 紘也 氏(東京大学大学院工学系研究科 特任講師)

○聴講者

公開視聴会場: 50名オンライン配信 (LIVE): 100名

○共催

弘前市



3. シンポジウムの様子

【司会】鳥潟 貴

(弘前大学社会連携部社会連携課長・大学コンソーシアム学都ひろさき企画運営委員)

基調講演

「ファブをしよう」

講師:鳴海 紘也 氏(東京大学大学院工学系研究科 特任講師)

ヒューマン・コンピュータ・インタラクション、特に特殊な素材と構造を活用したコンピュテーショナル・ファブリケーション、形状変化インタフェース、ソフトロボットなどの研究について述べられた。

会場を訪れた参加者からは、「難しいと思っていた分野だが興味を持つことができた」、「様々な事に興味を持ち、繋がりを持ちながら可能性を広げていきたい」などの声が聞かれ、有意義なシンポジウムとなった。

聴講方法は公開視聴及び青森県弘前市内のローカルニュースを扱う動画配信サービス(アップルストリーム)でのライブ配信によるハイブリッド形式で実施した。当日は公開視聴会場50名、ライブ配信からの視聴が100名、計150名が聴講した。





鳴海 紘也 氏

講演の様子

4. アンケート

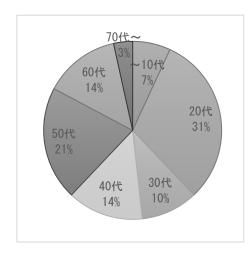
○来場者数 : 50名 ○当日視聴者数 : 100名

○アンケート回答者数: 29名

○回答者内訳

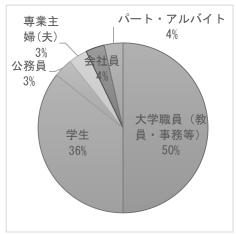
【年代別】

	回答数 (%)
~10代	2 (7 %)
20代	9 (3 1 %)
30代	3 (10%)
40代	4 (14%)
50代	6 (21%)
60代	4 (14%)
7 0代~	1 (3%)
計	29(100%)



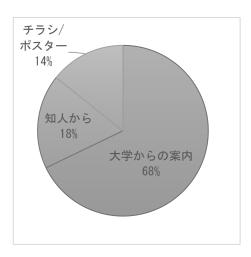
【職業別】

	回答	数 (%)
大学職員(教員,事務等)	14(50%)
学生	10(3 6 %)
公務員	1 (3 %)
専業主婦(夫)	1 (3 %)
会社員	1 (3 %)
パート・アルバイト	1 (3 %)
その他	1 (3 %)
計	29(1	0 0 %)



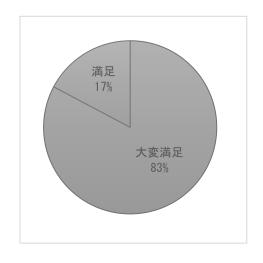
○今回のシンポジウムを何で知ったか。

	回答数 (%)
①大学からの案内	19(68%)
②知人から	5 (18%)
③チラシ/ポスター	4 (14%)
④広報ひろさき	0 (0 %)
⑤SNS/ブログ	0 (0 %)
®Н Р	0 (0 %)
⑦その他	1 (3 %)
計	29(100%)



○講演について

大変満足	24(83%)
満足	5 (17%)
どちらともいえない	0 (0 %)
ややもの足りない	0 (0 %)
もの足りない	0 (0 %)
計	29(100%)



○感想等

【シンポジウム感想等】

- ・難しいと思っていた量子学分野がとても興味深かった。
- ・デザインから色々な分野とつながる研究があって、それが社会貢献に発展していて、大変興味 深くお話を聞くことができました。制限のないアイディアが大切だと反省しつつ、今後の研究 の参考にしたいと思います。
- ・私が大学で学んでいる分野とは全く異なっていましたが、とても新鮮で複雑で独創的でとても 面白いお話でした。若いうちに様々なことに興味を持ちながら生活して、自分の可能性を狭め ないように今を楽しんでいきたいです。
- ・情報系に興味はあるものの、関わる機会がなかなかないため、ファブラボがぜひ弘前に出来て ほしいと思いました。私は、栄養学を専門として学んでいますが興味のあることに積極的に関 わっていきたいと思います。

5. 事業成果

会場を訪れた参加者からは、「難しいと思っていた分野だが興味を持つことができた」、「様々な事に興味を持ち、繋がりを持ちながら可能性を広げていきたい」などの声が聞かれ、有意義なシンポジウムとなった。

各大学公開講座等助成事業

1. 各大学公開講座等助成事業とは

本コンソーシアムを構成する弘前市内5大学が行う公開講座等事業(以下「事業」)の実施を補助することにより、各大学の特色を活かしながら蓄積する知を広く市民に向けて発信・還元することで、高等教育機関が集結する「学都ひろさき」を強く印象づけるとともに、市民が本コンソーシアム及び大学を身近な存在であると感じ、市民による大学の活用を促すことを目的とする。

2. 補助を行った事業

(1) 放送大学青森学習センター

	日林丁日にファ
事業名称	放送大学青森学習センター開設30周年記念公開講演会 「芸術・日本・ヨーロッパ」
主催	放送大学青森学習センター
内容	芸術は素晴らしい。日本は明治以来、ヨーロッパの芸術を盛んに吸収し、自国の文化に取り入れてきた。その成果は素晴らしく、ヨーロッパ芸術は、欧米以外の地球文化圏の中で特に日本において花開いた、とさえ言える面がある。何故このようなことがありえたのか。 関連して、弘前藩のお抱え大工で、旧第五十九銀行(青森銀行記念館)や旧弘前偕行社(弘前厚生学院記念館)等の斬新かつ華麗な洋風建築を手がけた堀江佐吉についても紹介した。 事業チラシ
日時	令和5年8月26日(土) 13:30~15:00
会場	弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール
実施状況等	○参加者数:68名

(2) 弘前医療福祉大学短期大学部

事業名称	弘前医療福祉大学短期大学部「青森県産食材を使った料理作品展」
主催	弘前医療福祉大学短期大学部 別科 調理師養成1年課程
内容	学習成果発表の場として、青森県産食材を使用した日本・西洋・中国料理のコースメニューを考案・製作して展示・公開し、調理実習担当講師による表彰のほかに、一般来場者による投票を実施した。 また、津軽を代表する郷土料理として昔から親しまれてきた「粥の汁」を、若い世代の視点から工夫した「アレンジ粥の汁」として試食を提供した。 さらに、県産食材を使用した料理を紹介することにより、県産食材の消費拡大につながることを願うとともに「食」にかかわる様々な話題や情報を発信した。
日時	令和6年2月23日(金・祝)11時30分~15時00分
会場	土手町コミュニケーションプラザ1階
実施状況等	○参加者数: 107名■

__(3) 柴田学園大学短期大学部

事業名称	特別公開講座 「つまみ細工をしてみませんか ~クリスマスリースを作りましょう~」
主催	柴田学園大学短期大学部 地域文化センター
内容	本学の前身である「和洋裁縫手芸教授」の日本伝統工芸「つまみ細工」を用いたクリスマスリース作製を一般市民向けに開講した。 手工芸の講座は好評で、以前から受講者より切望されていたが、3年ぶりに特別公開講座として開講することができた。 今回のクリスマスリースは和洋の融合で、和のつまみ細工(剣つまみの手法)でポインセチアを作りリースのメイン飾りとなる。そのほかのリース材料もたくさんの種類から選んでいるため、一つとして同じものがない個性あふれるリースが完成した。参加者からは「初めてつまみ細工を体験したが、とても楽しかった」「久しぶりに集中して作ることができリフレッシュになった」などの感想が寄せられ、一足早くクリスマス気分を満喫できた講座となった。
日時	令和5年12月8日(金) 13:30~16:00
会場	柴田学園大学短期大学部 平成館1階 アクティビティスペース
実施状況等	○参加者数: 20名

3. 補助事業実施による成果

本コンソーシアム構成機関が、各大学の特色を活かしたテーマを設定し、感染対策を講じながら公開講座を開催し、各大学が持つ知的シーズを提供した。これにより、高等教育機関が有する学術機能を地域社会に還元し、弘前市における教育・文化等の向上に寄与し、地域振興に貢献した。加えて、市民に「学都ひろさき」を印象づけ、市民による大学の活用を促すことが出来た。

【参考】同事業の要項

(1)補助対象事業

次に掲げる条件のいずれかを満たす事業を補助対象事業とする。なお、学園祭で市民向けの公 開講座として開催する事業は、補助対象外とする。

- ① 広く一般市民を対象とするもの
- ② より市民の目に触れ、より市民が参加しやすい形態で行われるもの(街なかの施設等、大学外の会場で行うなど)
- (2) 補助金の交付額と補助対象経費
- ① 補助金の額は、原則、1大学あたり上限50,000円とする。
- ② 補助対象経費は、事業を実施するために必要な以下の経費とする。
 - 会場借上費
 - ・チラシ・ポスター等印刷費 (制作費)
 - ・チラシ・ポスター等発送費
 - 事業実施に係る消耗品費
 - 外部講師謝金
 - ・各号に掲げるもののほか、本コンソーシアム会長が必要と認めたもの

令和5年度活動報告 Ⅲ. 学生交流事業

学生団体シンポジウム ~5大学 と 学生1万人 が弘前をつくる~

1. 趣旨

近年、地域に関心を持ち、地域活性化や地域貢献、PBL (Problem Based Learning:問題解決型学習法)として、ゼミや研究室、課外活動で、地域に出て活動をする学生が増え、それぞれに一定の成果をあげている。

しかし、団体同士の繋がりは薄く、連携がとれないことや特定の地域のみの活動、学生の地域 に根ざした活動を知らない市民が多いことが課題である。

そこで、学生の活動を広く公開することで、学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民が知ることのほか、大学の枠を越えた学生同士の交流の場をつくり、団体同士の繋がり強化、さらなる活発な活動を目指す。

2. 概要

学生団体シンポジウム

~5大学 と 学生1万人 が 弘前をつくる~

○日時

令和6年2月25日(日) 13時00分~16時00分

○会場及び配信方法

会場: 土手町コミュニティパーク 多目的ホール

配信:アップルストリーム配信

URL https://applestream.jp/16380/

○プログラム

13時00分 : 開会(挨拶等)

13時05分 : 学生地域活動支援事業 成果発表会

14時35分: 休憩

14時55分 : 学生団体活動発表

15時10分 : 学生地域活動支援事業 表彰

15時30分: 講評 (コンソーシアム企画運営委員)

16時00分 : 閉会

○共催

弘前市

○来場者数

約50名(学生、市民、大学及び行政関係者等)

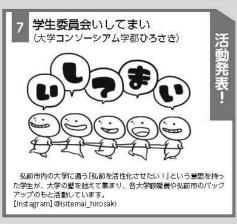
○LIVE 配信視聴者数

約150名(アーカイブ配信視聴数:約270回)



3. 参加学生団体





4. 会場の様子











進行役:学生委員会いしてまい







5. アンケート

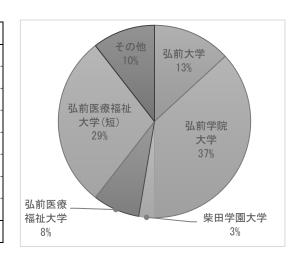
○対象者 : 参加学生等 ○回答者数/参加者数 : 38名/50名

○回答率 : 76%

○回答者内訳

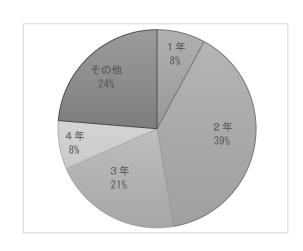
【所属別】

所属等	回答数 (%)
A. 弘前大学	5 (13%)
B. 弘前学院大学	14 (37%)
C. 柴田学園大学	1 (3%)
D. 柴田学園大学(短)	0 (0%)
E. 弘前医療福祉大学	3 (8%)
F. 弘前医療福祉大学(短)	11 (29%)
G. 放送大学	0 (0%)
H. その他	4 (10%)
計	38 (100%)



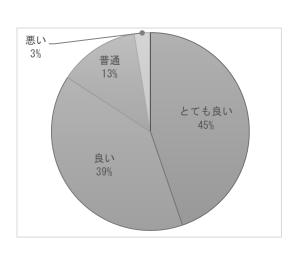
【学年別】

学年	回答数 (%)
① 1年	3 (8%)
② 2年	15(39%)
③ 3年	8 (2 1 %)
④ 4年	3 (8 %)
⑤ その他	9 (24%)
計	3 8 (1 0 0 %)



○「学生団体シンポジウム」の内容について。

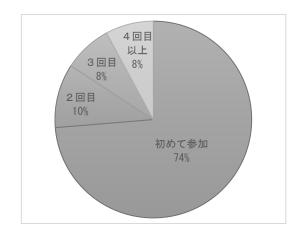
	回答数 (%)	
A. とても良い	17(45%)	
B. 良い	15(39%)	
C. 普通	5 (13%)	
D. 悪い	1 (3%)	
E. とても悪い	0 (0%)	
F. その他	0 (0 %)	
計	3 8 (1 0 0 %)	



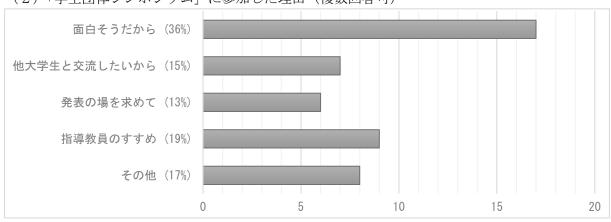
○「学生団体シンポジウム」への参加について

(1)類似イベント等への参加経験

	回答数 (%)
A. 初めて参加	28(74%)
B. 2回目	4 (10%)
C. 3回目	3 (8%)
D. 4回目以上	3 (8%)
E. その他	0 (0%)
計	38(100%)



(2)「学生団体シンポジウム」に参加した理由(複数回答可)

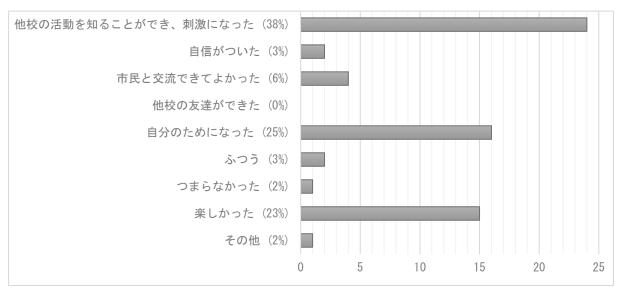


※【その他】の理由 (一部抜粋)

・友達からの勧誘。

・地元学生の地域での活動を知りたい。

(3)「学生団体シンポジウム」に参加した感想



(人)

(人)

(4) 来年も「学生団体シンポジウム」に参加したいか。

	回答数 (%)
A. 是非参加したい	18(47%)
B. 指導教員にすすめられれば参加すると思う	2 (5 %)
C. 卒業予定なので参加出来ない	1 (3%)
D. できれば参加したくない	2 (5 %)
E. 自分は参加しないが後輩にすすめる	1 2 (3 2 %)
F. その他	3 (8 %)
計	3 8 (100%)

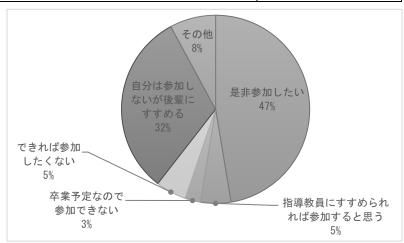
※回答の理由 (一部抜粋)

A. 是非参加したい

- ・1年の振り返りと次年への意欲になる。
- ・視野が広がり刺激になった。
- ・仕事としても連携できそうだと思った。

D. できれば参加したくない

・自分のイメージの地域 活性化と異なっていた。



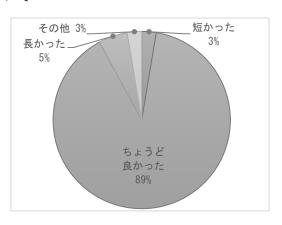
○「学生団体シンポジウム」の会場・時間配分について

(1)活動発表の時間

	回答数 (%)	
A. 短かった	1 (3 %)	
B. ちょうど良かった	3 4 (8 9 %)	
C. 長かった	2 (5 %)	
D. その他	1 (3%)	
計	38(100%)	

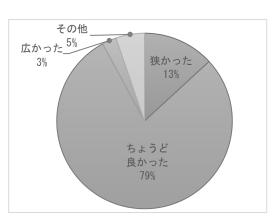
※【その他】の意見 (一部抜粋)

・時間はちょうど良かったが、団体によっては 内容を詰めすぎて理解するのが大変だった。



(2) ポスター展示ブースの広さ

	回答数(%)
A. 狭かった	5 (13%)
B. ちょうど良かった	3 0 (7 9 %)
C. 広かった	1 (3%)
D. その他	2 (5 %)
計	38(100%)

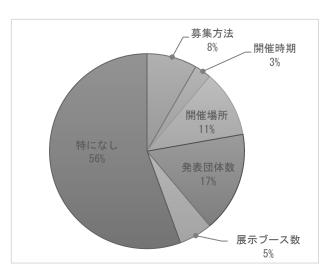


※【その他】の意見 (一部抜粋)

・テーブルがあっても良かったのでは。

○「改善すべき」と感じた点(複数回答可)

ord / C J C / C / C / C / C / C / C / C / C	
	回答数 (%)
A. 募集方法	3 (8 %)
B. 開催時期	1 (3%)
C. 開催場所	4 (11%)
D. パンフレット	0 (0 %)
E. 発表団体数	6 (17%)
F. 展示ブース数	2 (6 %)
G. 会場レイアウト	0 (0 %)
H. その他	0 (0 %)
I. 特になし	20(56%)
計	3 6 (100%)
•	



※【改善すべき点】の意見 (一部抜粋)

- ・学生だけでなく、一般市民にもニーズがあるはずなのでもっと広く告知すべき。
- ・もっと多くの団体を見てみたい。時期をもっと早くしてほしい。
- ・ポスターを見る時間をもっと作ってほしい。
- ・質問をしやすい環境を整えてほしい。
- ・聞いてくれる人が年々減っているように感じる。別イベントと統合した方が良い?

○自由記載 (一部抜粋)

- ・ゆっくり聞けて良かった。参加団体は多い方が参加する人、聞く人にとっても良いと思う。
- ・様々な団体の活動を知ることができて、今後の方針に活かせると思った。
- ・工夫していることや気をつけている点などを知れて勉強になった。
- ・学生が地域と関わったり、地域課題に気づく良い機会だった。広報にもっと力を入れれば活動のPRになって良い。
- ・アップルストリームのコメントで質問、感想を募れるのではないか。ターゲットを学生同士 の交流ではなく、ニーズがあると思われる学生と地域住民の交流にしてはどうか。毎年同じ 団体が表彰されるのは不公平感が生じるのではないか。

6. 事業成果

会場には約50名の市民、学生、関係者で賑わいを創出することができた。普段関わることが 無い異なる大学の学生が意見交換を行うことで、大学間交流に加え、互いの活動情報を共有する ことができた。

また、アップルストリームのLIVE 配信では約150名の視聴があり、見逃し用のアーカイブ配信では約10日間(令和6年3月6日時点)で約270回の視聴があった。これにより、当日来場出来なかった市民の方にも広く活動内容を周知することが出来た。

7. 反省点•改善点

- ○来場者数は去年同様だったものの、参加団体が少ない、もっと見たいとの意見が散見された。 事業の周知について改めて検討したい。
- ○数年に渡って同じ団体が表彰されていることから、特別参加とする等で他団体の評価の機会を 作りたい。
- ○質疑応答が少なめで、意見交換があまり行われなかった。発表に中休みを入れて考える時間を 作る(アンケートでご意見あり)、ポスター周辺に椅子等を配置し休憩時間に交流が生まれやす くするなど工夫が必要。

ひろさき移動キャンパス

1. ひろさき移動キャンパスとは

本コンソーシアムを構成する5大学が共同で「学都ひろさき」の魅力を県外にアピールすることにより、弘前で学びたいという学生の増加を目指し、また、他地域コンソーシアムとの交流を深め、本コンソーシアムの充実を図ることを目的として、北海道函館市の「キャンパス・コンソーシアム函館」が主催する「HAKODATEアカデミックリンク」に、本コンソーシアム構成機関の所属する学生団体がブース出展をする。

2. 概要

○開催日

2023年11月3日(金・祝)

○会場

函館アリーナ (函館市湯川町1丁目32-2)

○対象

中学生・高校生・一般市民・地元企業関係者ほか

○内容

キャンパス・コンソーシアム函館加盟8校のブース発表、ステージ発表

特別参加の高等学校・大学の学生らによるブース発表 企業・団体によるブース発表



3. 出展内容

○チーム名

学生委員会「いしてまい」

○タイトル

より良い弘前を創る・発信する

〇内容

いしてまいとは「大学コンソーシアム学部ひろさき」に加盟している弘前市内5大学の学生が「弘前のために何ができるのか」を考え企画・実行をしている学生団体です。各大学教職員や弘前市役所職員のバックアップのもと、地域の自立と発展を図っていくことを目的としています。いしてまいは津軽弁で「良すぎて仕方がない」という意味を表しており「弘前市のことを知りたい」、「地域に関わった活動をしてみたい」という思いを持った学生たちが、日々楽しく活動しています。主な活動は「飲食店企画」、「衣類回収ボックス設置」、「伝統文化企画」です。そして今年度から「弘



前市立博物館への取材活動」へも挑戦しております。今回は活動の目的・手段・成果・今後の課題について発表しました。

4. 会場の様子





5. 参加による成果・効果 (学生委員会からの報告)

4年ぶりに対面で開催され、直接、活動紹介や他団体と交流することができたことは、今後 の活動へのモチベーションとなった。

6. 今後の活動に向けて

今後も、弘前市内の学生団体の活動を県外へさらに発信できるよう努めていきたい。

学生委員会「いしてまい」活動

1. 飲食店紹介企画

(1) 企画の意義・必要性/期待される効果

弘前にある飲食店を学生が直接取材して SNS にて紹介することで、学生を中心とした弘前の人々が足を運ぶきっかけにしてもらう。

(2) 実施スケジュール

1	ミートソルジャー	2023年7月13日投稿
2	ブルーエイト	2023年7月19日投稿
3	お食事処あお菜	2023年8月3日投稿
4	もいき屋	2023年12月23日投稿
5	Jainic	2024年1月27日投稿







OOP

2. 衣類回収ボックス

(1) 企画の意義・必要性/期待される効果

昨年、衣類回収ボックスの事業の活動報告を行った際、団体内外から様々な意見や課題が挙がった。それらの意見を踏まえ、今年も衣類回収を行うことで、昨年に引き続き SDGs への貢献を行いたいと考えている。また今年は新たな試みとして、就労継続支援B型事業所と協働して衣類回収を行いたいと考えている。このことによって福祉事業の周知を図りたいと考えている。

- ○衣類回収ボックスを様々な人に利用してもらうことによって、ごみ問題へ意識を向けてもらう。
- ○主要なリサイクルショップが両大学付近にないため、身近に衣類回収ボックスを設置することによって、リサイクルに対するハードルを下げることが可能である。
- ○リサイクルを行うことによって、福祉に繋がる部分があるということを知ってもらう。

(2) 実施スケジュール

	就労継続支援B型事業所きりんの里・こばまゆ様に協働について交渉	
2023年10月~	弘前市環境課に衣類回収ボックス借用について交渉	
	告知物等作成開始	
2023年12月1日	大将同原ギックフ記墨(引並治院十治)	
~12月14日	衣類回収ボックス設置(弘前学院大学)	
2023年12月15日	衣類回収ボックス設置(弘前大学)	
~12月28日	秋類凹収 小ツク	
	回収した衣類の仕分け	
2024年1月	きりんの里様が運営する「リサイクルショップきりん」へ回収した衣類を	
	お引渡し	







告知物

設置の様子



回収した衣類



お引渡しの際は取材も受けました



きりんの里様へ

回収した衣類の量

制服 約 43kg ジャージ 約 2kg その他の衣類(靴含む) 約 72kg

合計 117kg

ご協力いただいた皆様、 誠にありがとうございました。

3. 弘前市立博物館への取材

(1) 企画の意義・必要性/期待される効果

学生目線で取材活動および情報発信することによって、弘前市立博物館が抱えている「より多くの学生に来館して欲しい」という課題解決の一翼を担う。また、来街者の増加にもつながることから、まちのにぎわい創出にも効果があると考える。

(2) 実施スケジュール

1	特別企画展1「隙あらば猫〜町田尚子絵本原画展〜」	2023年6月25日投稿
2		2023年8月11日投稿
3	企画展2「「バカ」がつくほど愛してる。	2023年8月12日投稿
4	~津軽塗・こぎん・ねぷた~」	2023年8月14日投稿
5		2023年8月15日投稿
6	特別企画展 2 「THE 新版画~版元・渡邊庄三郎の挑戦~」	2023年10月20日投稿





4. 伝統文化企画

(1) 企画の意義・必要性/期待される効果

弘前市内の伝統文化の取材・体験をし、SNSでの発信を行うことで、市内の大学に通う学生に対して弘前の魅力をさらに知ってもらう。

- ○県内外出身者に対して弘前の伝統文化の魅力を発信する。
- ○実際に大学生である委員自身が取材・体験をすることで伝統文化をより身近なものとして感じてもらえるようにする。

(2) 実施内容

津軽藩ねぷた村へ取材と太鼓叩き体験

5. 活動を通して

来年度は、今年度の活動の課題を解決し、さらに弘前市を盛り上げられるような活動をしていき たい。

大学コンソーシアム学都ひろさき 令 和 5 年 度 活 動 報 告 集

発 行 令和6年3月31日

編 集 大学コンソーシアム学都ひろさき

印 刷 やまと印刷株式会社 弘前市神田4丁目4-5 TEL 0172-34-4111

成





弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1 [TEL] 0172-36-2111 (代表) [ホームページURL] https://www.hirosaki-u.ac.jp/





柴田学園大学





弘前学院大学

〒036-8577 青森県弘前市稔町13-1 [TEL] 0172-34-5211 (代表) [ホームページURL] https://www.hirogaku-u.ac.jp/



〒036-8530 青森県弘前市清原1-1-16 [TEL] 0172-33-2289 (代表) [ホームページURL] https://univ.shibata.ac.jp





弘前医療福祉大学 弘前医療福祉大学短期大学部

〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1 [TEL] 0172-27-1001 (代表) [ホームページURL] https://www.hirosakiuhw.jp/





放送大学 青森学習センター

〒036-8561 青森県弘前市文京町3 弘前大学コラボ弘大7階 [TEL] 0172-38-0500(代表) [ホームページURL] https://www.sc.ouj.ac.jp/center/aomori/

大学コンソーシアム学都ひろさき

〒036-8560 青森県弘前市文京町1 (弘前大学社会連携部社会連携課内) [TEL] 0172-39-3160 [FAX] 0172-39-3919 [E-mail] conso@hirosaki-u.ac.jp http://www.consortium-hirosaki.jp/